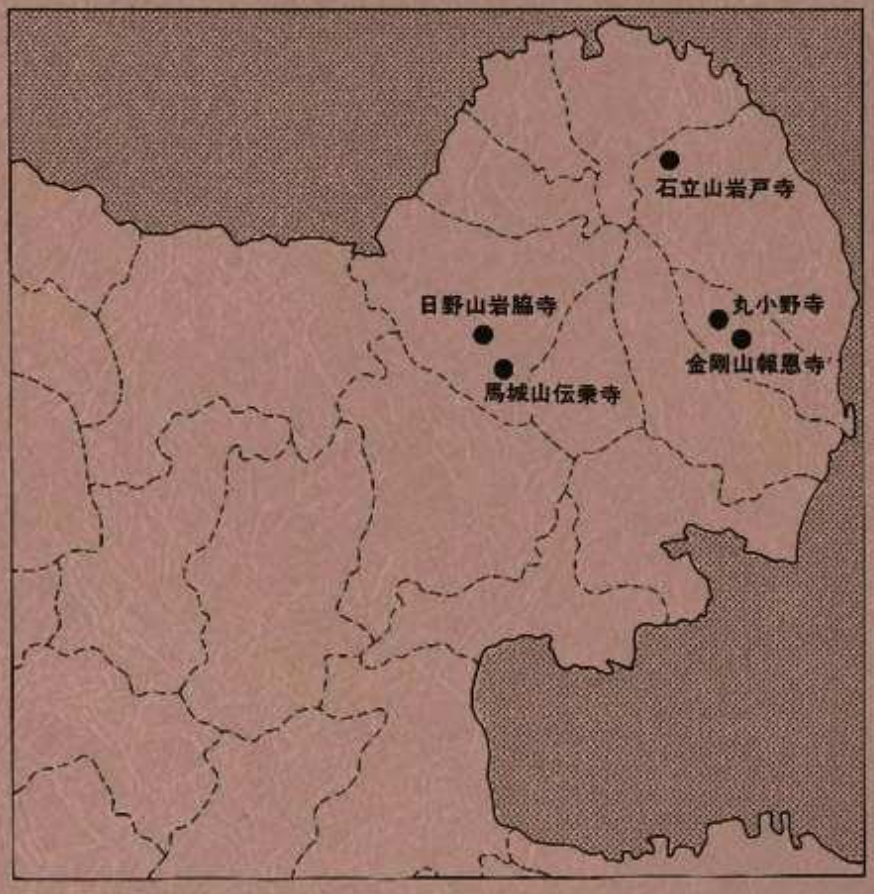
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第17集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ

馬城山伝乗寺・日野山岩脇寺・丸小野寺・金剛山報恩寺・石立山岩戸寺



1996

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ

馬城山伝乗寺・日野山岩脇寺・丸小野寺・金剛山報恩寺・石立山岩戸寺

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

序　文

国東半島一帯には古代から中世にかけて「六郷山」と総称される64ケ寺の天台宗寺院が存在します。この六郷山寺院は、諸資料によれば宇佐神宮を中心に国東半島の西側に本山、中央山岳部に中山、東側に末山が分布する三山形式に組織されていたとされていますが、その成立や実態などについては様々な論議があることは周知のとおりです。しかし、これらの中には早くから廃寺になったものや無住になったもの、はてはその位置さえわからなくなってしまった寺院さえ存在しています。このような状況下で、過疎化による六郷山寺院を支えてきた地元住民の激減とともに、近年の開発の波は、国東半島を覆い尽くすように進行し、六郷山寺院そのものが消滅の危機に瀕している現状にあります。

六郷山寺院の研究は、これまで文献側からのアプローチに偏っており、寺域やその規模、伽藍配置や各施設の遺構の状況等考古学的作業において把握すべき寺院の詳細は、ほとんど不明であるといった状態です。そのため当館では、平成４年度から３カ年にわたり18カ寺の基礎調査を行ってきました。しかし、六郷山寺院の全容を語るには未だ不十分な資料と言わざるをえなく、今年度から新たに３カ年継続して六郷山寺院の基礎調査を行う予定にしております。このような地道な作業の蓄積こそ現段階での六郷山寺院研究に必要不可欠な作業であると確信しております。

最後になりましたが、本調査の主旨をご理解いただき、ご協力を賜りました各寺院関係者および地元の方々、さらに地元教育委員会の皆様方に心から感謝し、御礼を申し上げます。

平成８年３月

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長
塔　鼻　勝　人

例　　言

1、本書は、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が、平成７年度から平成９年度の３箇年にわたり国庫補助を受けて実施予定している六郷山寺院遺構確認調査の平成７年度の報告書である。

2、平成７年度は伝乗寺（豊後高田市真中）、岩脇寺（豊後高田市嶺崎）、丸小野寺（武蔵町丸小野）、報恩寺（武蔵町麻田）、岩戸寺（国東町岩戸寺）を調査対象とした。

3、調査にあたり各寺院の住職・総代をはじめ、地元教育委員会の協力を得た。特に、伝乗寺関係の発掘調査においては調査対象地とした土地の地権者である荒城忠生・柏木重行・柏木松夫各氏のご理解とご協力を得た。また、各寺院の聞き取り調査ならびに周辺地域の踏査には以下の方々のご教示とご協力を得た。

伝乗寺――渡辺義彦

岩脇寺――伊美正文・伊美良邦・田原繁直

丸小野寺―野田文人・野田保生・三浦君夫・三浦國光

報恩寺――綾部文人

岩戸寺――郷司忠芳・郷司芳慮・迫　義明・吉武サダ子・吉武忠臣・吉武良人

併せて記して謝意を表したい。

4、調査にあたり、遺構・遺物の実測・写真撮影は各調査員が実施した。岩戸寺国東塔の作図は桑原幸則氏によるものである。

5、調査には以下の方々の参加を得た。

石垣幸子・今成幸子・財前和子・財前ミツ子・財前ヨリエ・野田文人・野田保生

三浦君夫・三浦國光・吉田あき子（敬称略、五十音順）

6、本書の執筆は以下のとおりである。

第１章　序説 …… 原田昭一

第２章　六郷山寺院の調査概要 …… 原田

第３章　六郷山寺院の調査

Ⅰ　馬城山伝乗寺（真木大堂） …… 原田

Ⅱ　日野山岩脇寺 …… 原田

Ⅲ　丸小野寺 …… 原田

Ⅳ　金剛山報恩寺 …… 原田

Ⅴ　石立山岩戸寺 …… 原田

第４章　調査のまとめと課題 …… 原田

第５章　岩脇寺の法会 …… 段上達雄

7、本書の編集は原田が行った。

本　文　目　次

第1章　序　　説 …… 1
第2章　六郷山寺院の調査 …… 3
　　Ⅰ　馬城山伝乗寺（真木大堂） …… 3
　　Ⅱ　日野山岩脇寺 …… 13
　　Ⅲ　丸小野寺 …… 23
　　Ⅳ　金剛山報恩寺 …… 32
　　Ⅴ　石立山岩戸寺 …… 42
第3章　ま と め …… 59
第4章　岩脇寺の法会 …… 63

図　版　目　次

第1図　六郷山寺院の主要分布図 …… 2
第2図　真木大堂位置図 …… 3
第3図　真木大堂（馬城山伝乗寺）周辺地形図 …… 5・6
第4図　真木大堂駐車場横トレンチ遺構図 …… 8
第5図　真木大堂駐車場横第2トレンチ南壁土層図 …… 9
第6図　真木大堂駐車場横トレンチ出土土器 …… 9
第7図　真木大堂古代公園内板碑実測図 …… 9
第8図　岩脇寺位置図 …… 13
第9図　岩脇寺境内遺構状況図 …… 14
第10図　岩脇寺周辺の歴史的環境 …… 17
第11図　丸小野寺位置図 …… 23
第12図　丸小野寺周辺地形測量図 …… 27・28
第13図　報恩寺位置図 …… 32
第14図　報恩寺周辺地形測量図 …… 35・36
第15図　岩戸寺位置図 …… 42
第16図　岩戸寺周辺地形図および坊跡配置図 …… 46
第17図　岩戸寺周辺地形測量図 …… 47・48
第18図　岩戸寺宝塔実測図 …… 49

第19図　鈴鬼男面 …… 64
第20図　鈴鬼女面 …… 64
第21図　荒鬼古面 …… 65

写真図版目次

写真1　真木大堂遠景（南西から） …… 10
写真2　真木大堂近景（南西から） …… 10
写真3　六所権現 …… 10
写真4　真木大堂駐車場横第1トレンチ（西から） …… 11
写真5　真木大堂駐車場横第1トレンチ（東から） …… 11
写真6　真木大堂駐車場横第2トレンチ（南から） …… 11
写真7　桜の馬場東端から移された石幢 …… 12
写真8　桜の馬場東端から移された板碑 …… 12
写真9　岩脇寺遠景（南から） …… 19
写真10　岩脇寺本堂近景（昭和50年頃、伊美正文氏提供） …… 19
写真11　岩脇寺護摩堂跡 …… 19
写真12　六所権現 …… 20
写真13　岩脇寺奥の院 …… 20
写真14　岩脇寺奥の院横石仏群 …… 20
写真15　岩脇宝塔 …… 21
写真16　岩脇寺宝篋印塔 …… 21
写真17　岩脇宝塔周辺五輪塔群 …… 21
写真18　伊美家旧墓地 …… 22
写真19　伊美家墓地 …… 22
写真20　浄眼和尚の墓碑 …… 22
写真21　澄賢和尚の墓碑 …… 22
写真22　丸小野寺遠景（北から） …… 29
写真23　丸小野寺参道（北から） …… 29
写真24　丸小野寺境内（南から） …… 29
写真25　丸小野寺講堂（南東から） …… 30
写真26　三所権現 …… 30
写真27　丸小野寺墓地 …… 30
写真28　丸小野寺講堂横板碑 …… 31

写真29　丸小野寺講堂裏宝篋印塔 …… 31
写真30　丸小野寺山門横国東塔 …… 31
写真31　旧本堂伝承地裏石塔残欠 …… 31
写真32　報恩寺遠景（東から） …… 38
写真33　報恩寺本堂・庫裏 …… 38
写真34　報恩寺観音堂 …… 38
写真35　報恩寺旧墓地 …… 39
写真36　三所権現鳥居 …… 39
写真37　報恩寺異形板碑 …… 39
写真38　報恩寺石幢 …… 40
写真39　報恩寺墓地（その１） …… 40
写真40　報恩寺墓地（その２） …… 41
写真41　可春上人の墓碑 …… 41
写真42　岩戸寺遠景 …… 52
写真43　岩戸寺講堂 …… 52
写真44　六所権現 …… 52
写真45　岩戸寺奥の院 …… 53
写真46　岩戸寺鬼の石屋 …… 53
写真47　岩戸寺明賢洞 …… 53
写真48　岩戸寺宝塔 …… 54
写真49　岩戸寺宝篋印塔 …… 54
写真50　六所権現社務所 …… 54
写真51　岩戸寺石幢 …… 55
写真52　坊中五輪塔群（その１） …… 55
写真53　坊中五輪塔群（その２） …… 55
写真54　岩戸寺墓地 …… 56
写真55　澄圓墓碑・徳本上人供養塔 …… 56
写真56　三十仏仁王像 …… 57
写真57　三十仏・六所権現 …… 57
写真58　新徳阿弥陀堂跡 …… 57
写真59　吉武良人氏所有宝篋印塔・馬頭観音石祠（伝中之坊跡） …… 58
写真60　迫義明氏所有石塔群（伝迫坊跡） …… 58
写真61　迫義明氏所有五輪塔群（伝迫坊跡） …… 58
写真62　荒　鬼　面 …… 65
写真63　災 払 鬼 面 …… 65

表　目　次

第1表　馬城山伝乗寺関係文献一覧表 …… 4
第2表　日野山岩脇寺関係文献一覧表 …… 15
第3表　丸小野寺関係文献一覧表 …… 24
第4表　金剛山報恩寺関係文献一覧表 …… 33
第5表　石立山岩戸寺関係文献一覧表 …… 43・44

第1章　序　　説

（1）　調査に至る経過

国東半島には、古代から中世にかけて繁栄した「六郷山」と総称される60数ヶ寺の天台宗寺院が所在する。しかし、早くから廃寺になったものや無住の寺も少なくなく、なかには位置さえ分からなくなったものも存在する。現在まで存続している寺院にしても、古代や中世の状況は不明な点が多いが、近年の開発の波はこれらの寺院の周辺にまで及びつつあり、過疎化の進行とともに六郷山寺院は大きな危機にさらされるようになった。

六郷山寺院については、これまで主として文献側からの研究に偏っていたため、考古学的調査がほとんど行われておらず、寺域や寺の規模、伽藍配置、遺構の状況といった寺院の詳細についても不明な点が多かった。そこで、六郷山寺院の概略的な全体像を把握するため、現状の記録と併せて、寺院遺構の存否、遺存状況、寺域などについて確認を行い、可能な限り図化して基本資料を作成し、六郷山寺院の研究に資するとともに将来の開発に対処する事を目的とした。

当館ではすでに3カ年に及び六郷山寺院の遺構確認調査を行ってきたが、六郷山寺院総数のわずかしか果たしえていないのが現状であり、六郷山寺院に関する考古学的基礎資料はいまだ不十分と言わざるをえない。今年から3カ年にわたり、さらに六郷山寺院の遺構確認調査を継続し、資料の蓄積を試みるものであるが、今年度は馬城山伝乗寺、日野山岩脇寺、丸小野寺、金剛山報恩寺、石立山岩戸寺をその対象地とした。。

（2）　調　査　組　織

1．調査責任者

大分県教育委員会教育長　　田中恒治

2．調査委員及び調査員の構成

調査委員

賀川光夫	別府大学教授
中野幡能	元別府大学教授
後藤宗俊	別府大学教授
小田富士雄	福岡大学教授
関　秀夫	東海大学教授
千々和　到	国学院大学教授

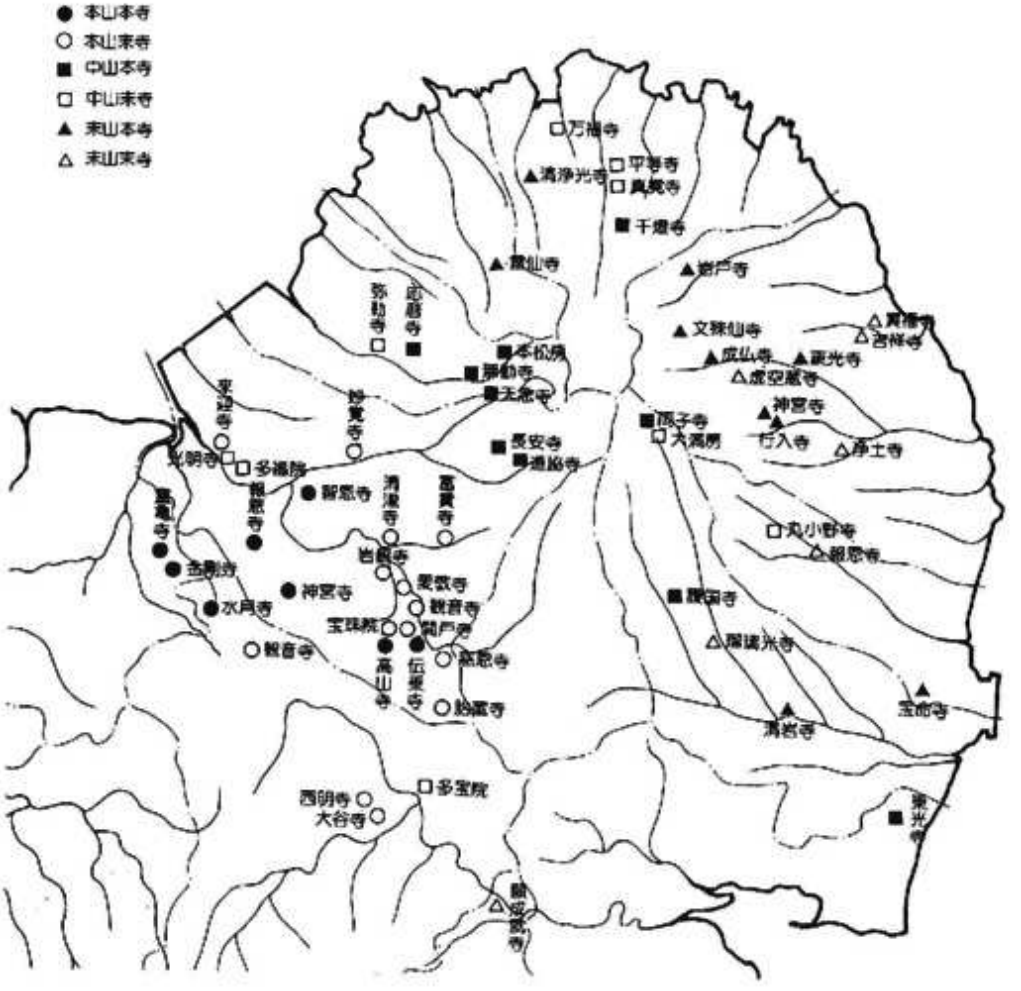
調査員

塔鼻勝人	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館館長	
小野浩英	同	副館長
甲斐忠彦	同	学芸課長
真野和夫	同	調査課長
渡辺文雄	同	主幹研究員

山田拓伸	同	主任研究員
段上達雄	同	主任研究員
原田昭一	同	主任研究員
櫻井成昭	同	研究員
嶋田由希子	同	嘱託
堀　優子	同	嘱託
飯沼賢司	別府大学文学部助教授	
秋吉心良	大分県教育庁文化課課長補佐兼文化財管理係長	
清水宗昭	同　主幹兼文化財第一係長	
綾部次男	豊後高田市教育委員会社会教育課長	
金田信子	国東町教育委員会文化財係長	
神崎哲也	武蔵町教育委員会生涯学習課	

調査事務

河野孝一	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館総務課長



第1図　六郷山寺院の主要分布図　（『仁安三年六郷二十八山本寺目録』による）

第２章　六郷山寺院の調査

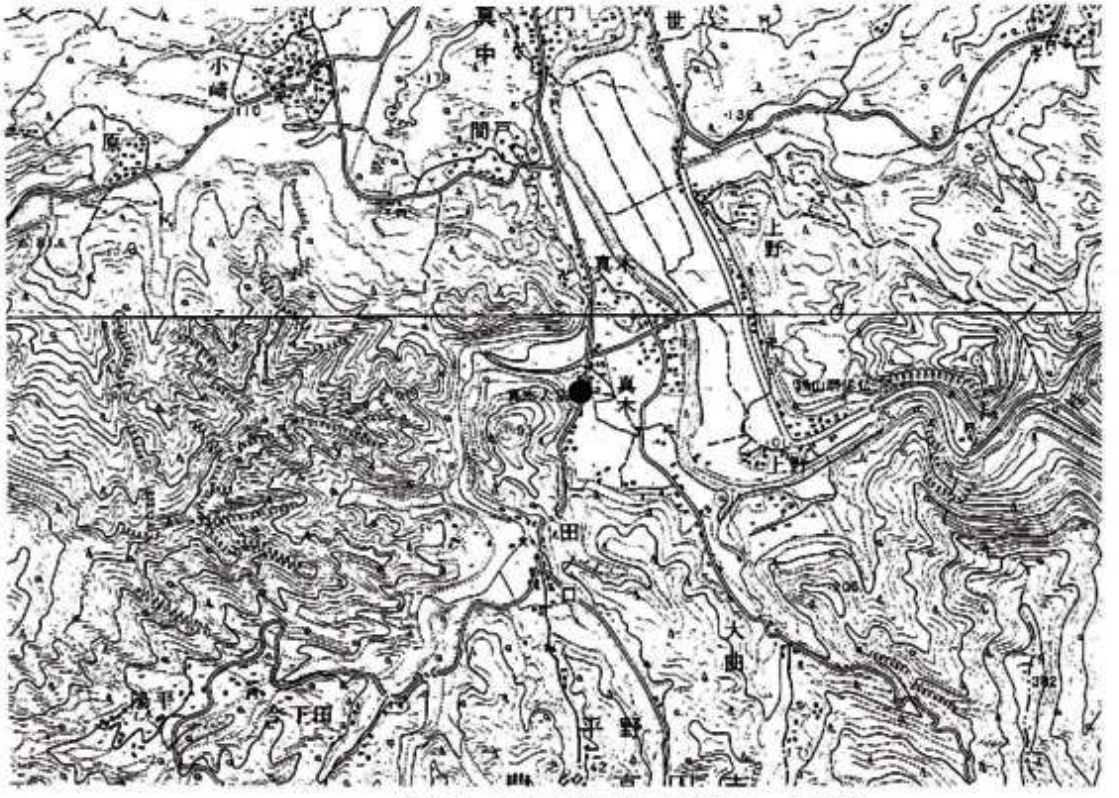
Ⅰ　馬城山伝乗寺（真木大堂）

馬城山伝乗寺は豊後高田市大字真中字真木に所在する。現在は真木大堂と呼ばれる江戸時代の建物と、現在、真木大堂の横に建てられた収蔵庫に移された仏像群を残すのみであり、馬城山伝乗寺の面影を残す遺構遺物は極めて少ないと言わざるをえない。

馬城山伝乗寺に関する文献の記載を列記すると第１表に記した通りである。

これをみると、『太宰管内志』の「六郷山定額院主目録」には「馬城山伝乗寺号修善院衆徒三十六坊」とあり、当時の繁栄ぶりの様子はうかがえるものの、具体的にどのような様相を呈していたものかはほとんど不明である。また、残された多くの文献には「馬城山」や「伝乗寺」と表記されているのに対して、最も古い記録とされる安貞２年（1228）の「六郷山諸勤行並諸堂役諸祭等目録」には「喜久山」とあり、馬城山伝乗寺が本来、現在の場所に位置していたものがどうかをはじめとして不明部分の多い寺院であることがわかる。

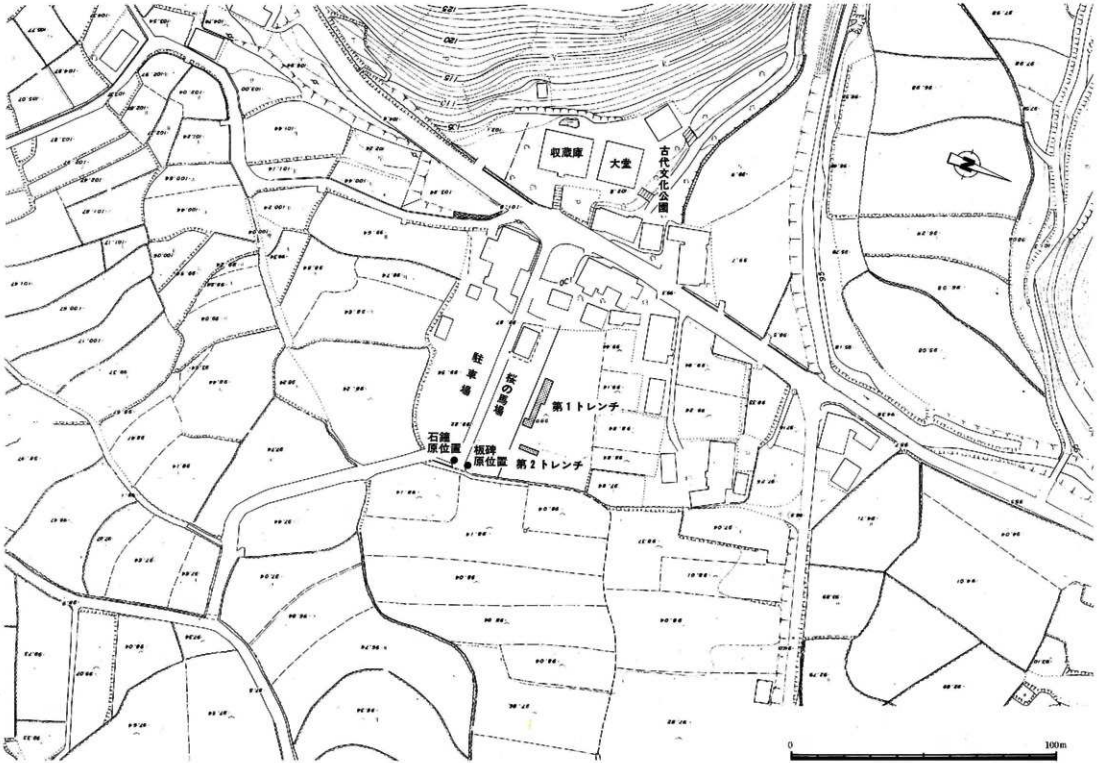
現在、馬城山伝乗寺であると伝えられる真木大堂には、正面に昭和41年に建てられた収蔵庫、その右側には大堂が存在し、これらの建造物の北側には周辺各地から様々な石造物を集め、古代文化公園として休憩所も建てられている。また、その背後にそびえる馬城山頂に参道の階段を設け、中腹に六所権現、また山頂に金毘羅社がみられる。現状、確認できる馬城山伝乗寺の遺構は



第２図　真木大堂位置図（縮尺１：25,000）

第1表　馬城山伝乗寺関係文献一覧表

年　号	出　典	記　載　事　項	備　考
安貞2年 (1228)	六郷山諸勤行並諸堂役諸祭等目録	本山分一喜久山本尊丈六皆色阿弥陀如来丈六不動同大威徳種々動等中絶	長安寺文書
?	六郷山諸勤行注進目録	本山分一不動ノ石屋木尊不動尊五丈石身深山真明如来ノ自作	太宰管内志
建武4年 (1337)	六郷山本中末次第並四至等注文案	本山付末寺一馬城山　限東赤岩辻　西ハエホシ瀬　限南六太郎　美濃　限北光広 委院主所持證文爾明白也但近年　曾禰崎十郎得領	永弘文書
寛政10年 ～享保3年 (1798～1803)	豊後国志	伝乗寺　在田染郷真木村　号馬城山	
仁安3年 (1168) ※但し後世の作	仁安三年六郷二十八山本寺目録	序分八箇寺馬城山伝乗寺	太宰管内志
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	六郷山定額院主目録	馬城山伝乗寺号修善院衆徒三十六坊	太宰管内志
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	太宰管内志	〔国ノ人伝〕馬城山伝乗寺は田染郷真木村平地なり　田染郷ノ内方 本堂のみ残れり入り 五間横十間許もあるべし不動威徳明王相殿なり	



第3図　真木大堂（馬城山伝乗寺）周辺地形図

極めて少なく、『太宰管内志』の「六郷山定額院主日録」にみられる「馬城山伝乗寺号修善院衆徒三十六坊」と記されているような往時の繁栄の足跡を語る遺構遺物は現状では把握しがたい状況にある。

今回の調査では、真木大堂周辺に中世期の遺構がほとんど確認できないため、「桜馬場」と呼ばれる参道脇の畑地にトレンチを設定して、発掘調査を行った。以下では、現在に残る遺構をはじめ、発掘調査の成果を述べたい。

真木大堂

馬城山伝乗寺に関する唯一の建造物であった真木大堂は、昭和41年の収蔵庫建設に際して現位置に移されている。現在、真木大堂が建てられている地点は昭和初期には畑と溜池が存在していたようだが、溜池は埋め立てられ、本来、当面していた大堂を南面して移築されている。真木大堂を象徴する大威徳明王像をはじめとする9体の仏像は本来、大堂に安置されていたものだか、現在は収蔵庫に移されているため、現在は地元の集会所として利用されている。現在は瓦葺きであるが、移築後に茅葺きから葺き替えたものであり、本来は茅葺きであったようである。建築構造の詳細は『大分県の近世社寺建築』(大分県教育委員会、1987) に詳しく、ここでは割愛するが、正面3間、側面5間の宝形造を呈する。現在、大堂には「安永十辛丑天(1781)本尊阿弥陀如来奉再興大堂一宇」と記された棟札が残されており、また、同じ紀年銘をもつ大堂再建に関する角塔婆もみられることから、この大堂は安永10年に建てられたものと考えられている。

金毘羅社・六所権現

真木大堂の背後には馬城山頂につづく参道が延びている。山頂には金毘羅社の石祠が今に残り、その銘文から文化15年(1818)に造立されたことがわかる。また、その銘文から氏子中に真木村・菊山村・陽平村・薗木村・田の口村・大曲村・観音堂村・上野村の各村が加わっていることがわかる。

また、金毘羅社に続く参道の途中に六所権現として6基の自然石が祀られている。これは昭和43年頃、現在、真木大堂案内所が位置する場所から現位置に移したと伝えられるものであるが、旧位置での祭祀状況などその詳細は明らかでない。

発掘調査の成果

天保7年(1836)に書き写された「豊後国田染組真木村絵図」は、その成立事情から元禄2年(1689)の状況を伝えるものであり、これには現在に残る真木大堂の周辺の様子も描かれている。これによると、今回調査の対象とした「桜馬場」と呼ばれる参道の北側駐車場横の畑地は、17世紀後半には畑地あるいは農家の敷地であったようである。

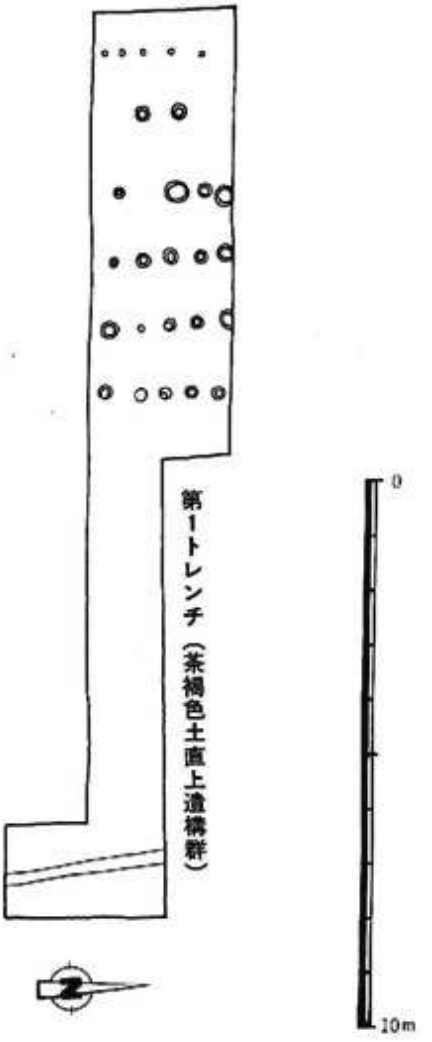
第1トレンチが50㎡、第2トレンチが11㎡の範囲で調査区を設定し、発掘調査を行った。第1トレンチでは、深さ約30㎝の耕作土下において遺構面に達し、ピット・溝状遺構が検出できた。第1トレンチの面積ではピット群の広がりをおさえきれるものではなく、掘立柱建物の配置や各柱穴の対応関係など把握できるものではなかった。

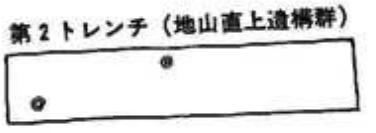
ピット・溝状遺構とも遺構内からはほとんど遺物の出土は見られず、出土しても微細な土器片が

わずかにみられるのみであった。2トレンチでは1トレンチにみられる遺構面上において遺構が確認できず、さらに下層の調査を行った。2トレンチでは表土下に深さ20cmの茶褐色土層がみられ、その下に茶黄色粘質土の地山がひろがる。茶褐色土層はその色調の濃淡により、上下2層に分けられるが、この両層は多くの土師質土器の細片や少量の白磁の破片を含む遺物包含層であり、その下層である地山面上にピットが2基検出されている。しかし、第2トレンチがわずか11㎡という小面積であることから、その広がりまで確認するには至らなかった。

図化しえる遺物は第6図に示したが、いずれも細片であり、径を出しえたものもすべて反転復元することにより径を求めたものである。1・5は第2トレンチ耕作土中から、2・3・4は第2トレンチ茶褐色土層から出土したものである。2・3・5は土師器坏であり、4は土師器皿である。2・5は底部と体部の境が明瞭で底部は回転糸切りにより切り離されているが、5にはその上から板状圧痕がみられる。5は底径約13cm、2は底径約8cmを測る。また、4は底径5cm、口径6.8cm、器高1cmを測り、底部は回転糸切りにより切り離されているが、その上から板状圧痕がみられる。3は土師器坏であると考えられるが、細片のため口径は復元できず、また傾きも推定である。体部中央において屈曲し、やや端反り気味にのび、口縁は丸くおさまっている。1は青磁碗であり、復元口径17cmを測る。これらの遺物をはじめとしてそのほとんどが細片であり遺物包含層の時期を決を決めるのは大変難しいが、中世におさまるものと考えられよう。

この両トレンチから2時期の遺構が確認でき、第2トレンチからは中世の、また、第1トレンチからは中世以降の遺構であることが、遺物包含層





第4図　真木大堂駐車場横トレンチ遺構図

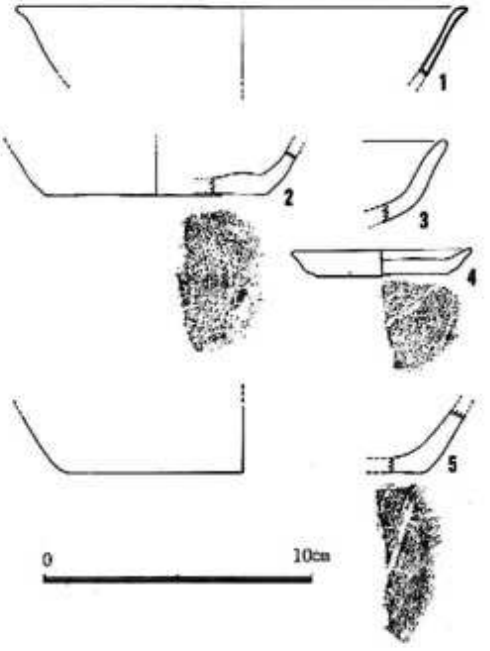
から推測できる。

周辺の石造物

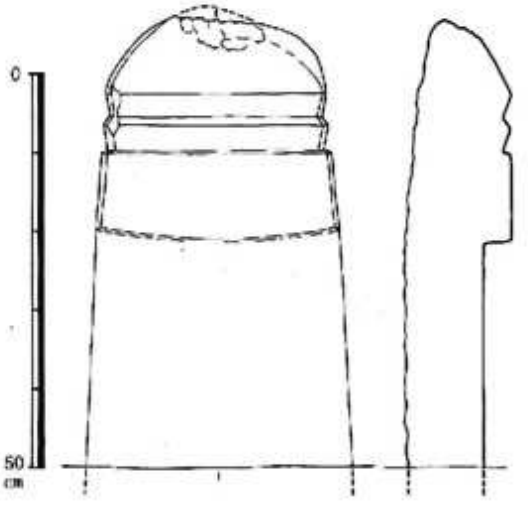
馬城山伝乗寺に関する石造物で現存する類例は極めて少ない。前述したように境内に古代文化公園として周辺地域の石造物がみられるが、その範囲は田染盆地に限らず集められている。しかし、板碑1基と石幢1基が真木大堂周辺から持ち込まれており、馬城山伝乗寺周辺地域の歴史的環境を物語る数少ない資料として注目できよう。

板碑・石幢は「桜馬場」と呼ばれる参道端の両端に置かれていたものを、古代文化公園造設に際して境内に持ち込まれたものである。板碑は第7図に示したように碑身部で切損しているが、参道端南側に置かれていたときから現状を呈していたといわれている。また、石幢は各部位の損傷が著しく、幢身も失っている。石幢も板碑と同様に古代文化公園造設に際して境内に持ち込まれたものであり、板碑が参道端南側に置かれていたのとは対照的に北側に置かれていた。両者とも真木大堂に続く参道を意識して建てられたものと推測できるが、移転以前から両者の残欠は全く確認できず、造顕時とはかなり時代を隔て、破損した状態で他所から参道端に移転されたと考えるべきであろう。地元の話によれば真木大堂の前面にひろがる水田部の畦道には近年まで数多くの石塔類が散在していたようだが、現在は他所へ移され、原位置にあるものはほとんど確認できない。それゆえ古代文化公園内に持ち込まれた板碑・石幢を含めて、これらの石塔類が馬城山伝乗寺に関するものかどうかは一切不明である。

第5図　真木大堂駐車場横第2トレンチ南壁土層図



第6図　真木大堂駐車場横トレンチ出土土器



第7図　真木大堂古代公園円板碑実測図

写真 1
真木大堂遠景
（南西から）

写真 2
真木大堂近景
（南西から）

写真 3
六所権現

写真 4
真木大堂駐車場横
第 1 トレンチ
（西から）

写真 5
真木大堂駐車場横
第 1 トレンチ
（東から）

写真 6
真木大堂駐車場横
第 2 トレンチ
（南から）

写真 7
桜の馬場東端から移された石幢

写真 8
桜の馬場東端から移された板碑

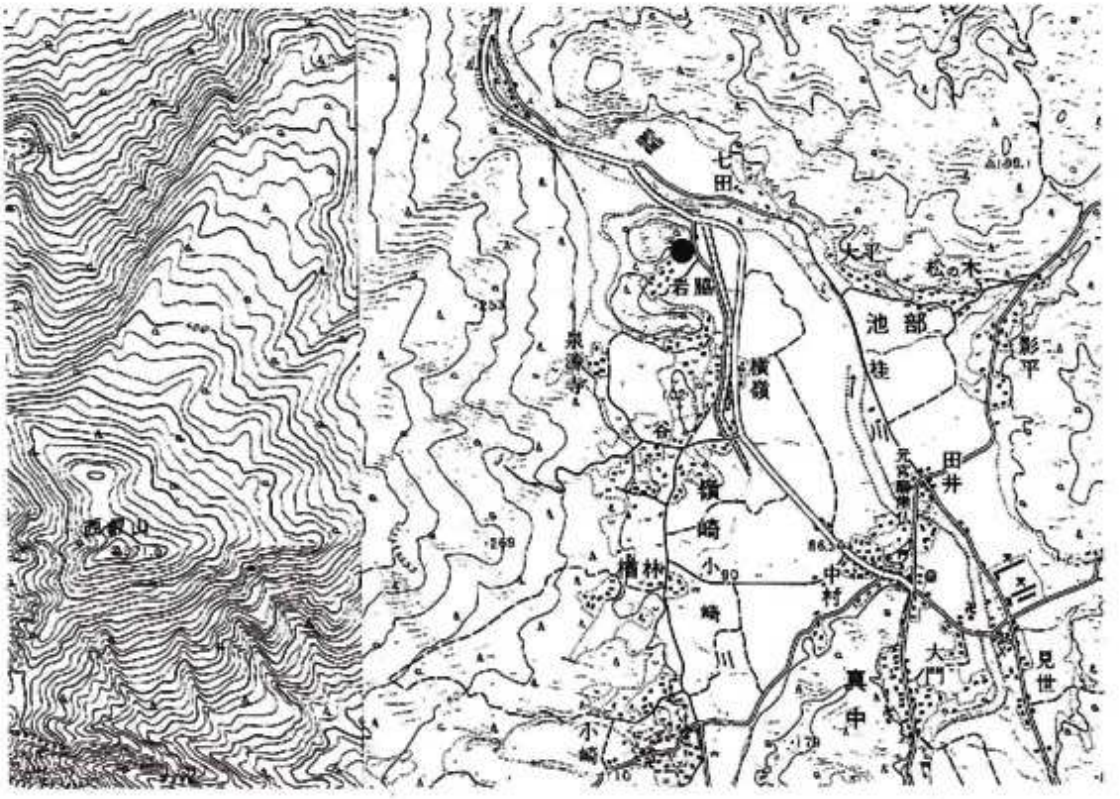
Ⅱ　日野山岩脇寺

六郷山寺院の本山末寺のひとつである岩脇寺は豊後高田市大字嶺崎字岩脇に位置する。背後から西側にかけて丘陵が延び、また、東側には尾崎川の旧河道が走り、この両者に挟まれた狭隘な水田地帯の奥隅に岩脇寺が存在する。

岩脇寺に関する文献の史料を集成すると第2表に示した通りである。岩脇寺に関する初出史料としては、建武4年(1337)の『六郷山本中末次第並四至等注文案』にみられる「日野岩屋」の記載であるが、中世期の史料はこれのみであり、その詳細は一切明らかでない。

当寺に残る『寺院所有物明細帳』[1]には養老2年、仁聞菩薩の開基と伝えられている。また「然ルニ天正十四年国主大友ノ丙戌兵火ニ罹リ堂社悉ク焼失セリ其後中興浄眼大和尚諸人ノ信意ヲ以テ岩脇寺ヲ再建致シ」と記されており、万治年間（1658～61）に浄眼により再興されたことがわかる。また、「中緒本堂再建ニ付寛政五癸丑年三月松平王殿頭源忠馮公ヨリ白銀拾五枚寄附拾ヨリ金拾五両寄進並拾九ヶ村竹木人夫等寄附現住寂照和尚代」とあり、寛政5年（1793）、寂照の代には本堂の再建が行われており、近世の岩脇寺の様子は詳細に記録されている。

現在、岩脇寺に残る建物遺構は、境内に本堂と鐘楼が、また背後の崖上に奥の院と六所権現が残るのみであり、以下では、これらとともに石祠・石造物および周辺遺構を含めて述べたい。



第8図　岩脇寺位置図（縮尺1：25,000）

本　　堂

『寺院所有物明細帳』（明治42年）に「一本堂梁行三間桁行五間 一庫裡梁行三間桁行六間」と記録されている。地元の伊美正文氏の話によれば、同一の建物を本堂と庫裡部分を分けて使用したものであり、本来は茅葺きであったものを、昭和40年代に茅葺きの上からトタン屋根をかけ、庫裡部分だけ取り壊して現在の本堂に手直ししたとのことである。現在、トイレが造られている。本堂南西側の続きには一部には礎石も見られる土壇状の高まりが残り、その前面に本堂前に見られる２段の石段が続いている。

護摩堂跡

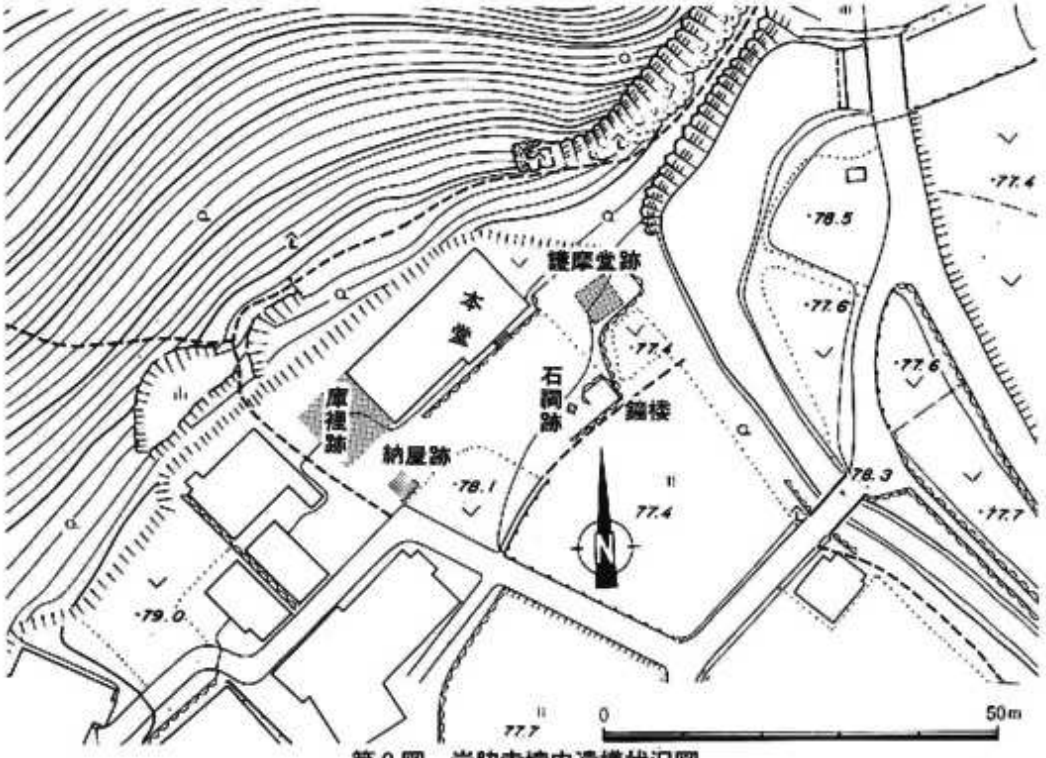
『寺院所有物明細帳』（明治42年）には「一護摩堂梁行四間桁行四間」と記されている。現在は本堂東側に礎石のみが残っており、石段から南西に面していたことがわかる。伊美正文氏の話によれば、昭和20年代まで存在していたようである。

鐘楼・石殿跡

『寺院所有物明細帳』（昭和15年）には鐘桜の存在が記されている。明治42年の段階では、鐘楼の記載がなく、この間に建立されたものであろう。また、鐘楼西南側には石殿の基礎となる石組みが残されている。現在、この石殿は伊美政男氏宅に移されている。

納　屋　跡

本堂の南側には、南側部分のみ礎石がみられる。『寺院所有物明細帳』（明治42年）には「一納屋梁行二間桁行五間半」と記されているが、伊美正文氏の記憶によれば、昭和初期にはもう既に



第９図　岩脇寺境内遺構状況図

第2表　日野山岩脇寺関係文献一覧表

年　号	出　典	記　載　事　項	備　考
建武4年 (1337)	六郷山本中末次第並四至等注文案	本山末寺一 …日野岩屋… 馬城寺末寺也 彼寺領多分 曾禰崎十郎入道押領	永弘文書
仁安3年 (1168) ※但し後世の作	仁安三年六郷二十八山本寺目録	本山分末寺　日野山岩脇寺	太宰管内志
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	六郷山定額院主日録	岩脇寺正等院徒六房有之ハ鳥原領山門末一本尊不動十二天天神今宮一奥ノ院ノ岩屋一六所権現高山六所権現 岩脇寺権 一高山堂 正等院前 一本堂阿弥陀観音十王岩脇寺末寺　喜福寺在＝同村－	太宰管内志
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	太宰管内志	〔国ノ人伝〕岩脇寺は田染郷横峰村にあり東向にして入る 一間半横六間の堂あり 本尊は不動尊なり前に小流あり	

存在していなかったようである。

六所権現・奥の院その他

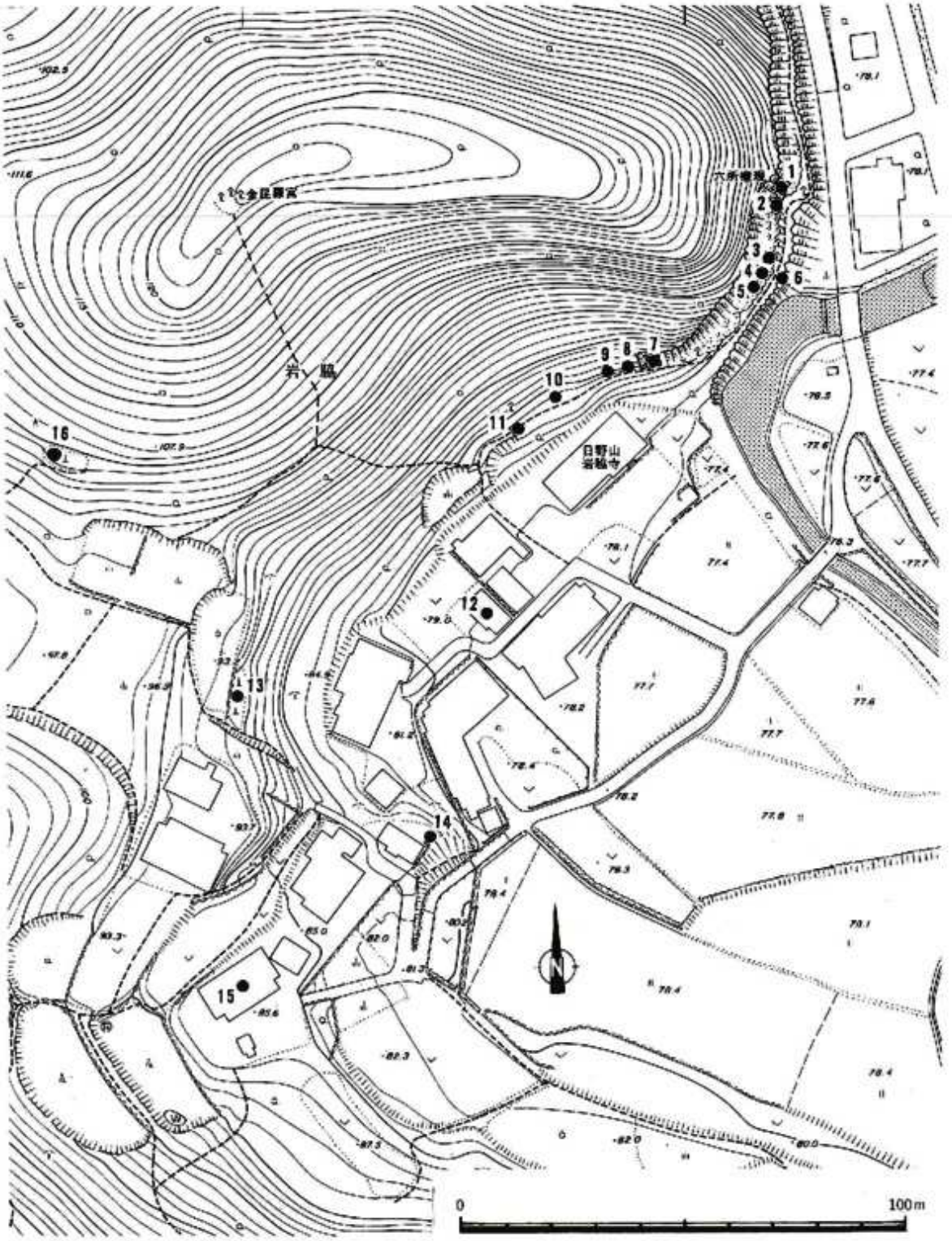
本堂南西側から丘陵部に通ずる小路があり、分岐路を左に登れば丘陵頂上の金毘羅宮に続き、右に向かえば六所権現・奥の院に通ずる。六所権現・奥の院の入口には、まず六所権現の石鳥居が建てられている。鳥居には「安政六年（1859）己未冬十二月 村正 渡辺源兵衛源知 願主 氏子中 別當 教成院豪真法印 石工 大力村 大野壽右衛門」の銘文がみられ、石鳥居をくぐると両端に石灯籠が存在し、南側の石灯籠には「元治二年（1865）」の紀年銘がみられる。また少し進むと丘陵側に「明治三十四年」の紀年銘をもつ稲荷大明神の石祠がみられ、さらに進むと、五輪塔の部材を積み上げた石塔がある。また、崖面に縦約１m、横0.4mの板状自然石が立てられている。ここから六所権現に向かう小路は崖面に掘削されているが、まず、道に隣接する崖に崖を掘り窪めて石祠を安置しているものがみられる。石祠には「寛政五癸丑年（1793）四月四日 惣左ェ門 氏子中 天下太平国土安全爲御領主御武運長久 願主當山現主寂照敬白」の銘文があるが、『寺院所有物明細帳』（明治42年）によれば、この石祠は稲荷神社であることがわかる。

さらに進むと崖面上に２カ所の磨崖仏が彫られている。両者とも風化が著しく、尊像を確認するのは困難であるが、『寺院所有物明細帳』（明治42年）に「一六地蔵菩薩 巌面六個 由緒日野岩屋 養老元年仁聞大士彫刻」「一佛像 巌面六個 由緒仁聞大士作仏面不祥右同所」とあるため、奥側の比較的に尊像の残りが良好な方が六地蔵菩薩であると考えられよう。この両磨崖仏に挟まれる位置に弘法大師の石像があり、その下の崖面を刳り貫いた箇所と奥の院の間には不動観音地蔵（西国八十八ケ所本尊）石像が88体置かれているが、『寺院所有物明細帳』（昭和15年）によれば、これらは昭和６年に持ち込まれたことがわかる。弘法大師の石像の前には宝篋印塔がみられる。この宝篋印塔は塔身以下のみが残り、そのうえには五輪塔の空風火輪が置かれているが、これには「右伏請三宝証明諸天門 応永三十三□丙九月十八日（1426）」の銘文がみられる。なお、この宝篋印塔が岩脇寺の表鬼門になると地元では伝えられている。この最奥に奥の院と隣接して六所権現がみられる。六所権現の前には石祠がみられ、銘文から明治25年につくられたことがわかり、また、その前面に置かれている石灯籠は文久元年（1861）に作られている。

周辺の石造物

岩脇寺の南方に位置する芹川氏宅の倉庫裏の露頭岩上には宝塔が置かれている。総高136cmを測り、五輪塔形を呈する水輪には四方に顕教四仏の種子が薬研彫りされている。釣り合いのとれた優品であり、鎌倉末～南北朝初期に製作されたものであろう。また、この宝塔の周辺には中世後半のものと考えられる五輪塔の残欠や一石五輪塔が集められている。

また、岩脇寺周辺には伊美姓をもつ家が多く存在するが、岩脇寺周辺に見られる比較的古い墓はこの伊美一族の先祖墓と言われている墓地しかみられない。伊美家旧墓地は河原石を組み合わせた配石墓からなるが、２基のみ墓碑をもち、この両者は平野部よりはむしろ丘陵部に向き、墓碑直前には石垣が積まれているという奇異な現象が見られる。ただ、その方向は西叡山に向かうとも、西方に向かうとも解釈できる。最奥部に建てられた墓碑は『寺院所有物明細帳』に「其後



第10図　岩脇寺周辺の歴史的環境
1、六所権現　2、奥の院　3、磨崖仏（六地蔵）　4、弘法大師石像　5、磨崖仏（尊像不明）
6、岩脇寺宝篋印塔　7、石祠（稲荷）　8、板石　9、五輪塔残欠合わせ　10、稲荷大明神
11、六所権現石鳥居　12、岩脇寺産所跡　13、伊美家旧墓地　14、岩脇宝塔と五輪塔群
15、伊美政男氏宅（岩脇寺の仮寺院）　16、伊美家墓地

中興浄眼大和尚諸人ノ信意ヲ以テ岩脇寺ヲ再建致シ」とみられる浄眼の墓であり、墓碑にはその年号を万治5年（1662）と記している。

また、この伊美家旧墓地に続き、その上方の丘陵上に墓地を営んでいる。その初期の墓碑のなかには旧墓地と同様に西方に向いているものが見られるが、それ以降のものはいずれも南方に向いている。初期の墓碑のなかには正徳4年（1714）に没した澄賢の墓である無縫塔もみられ、一族から岩脇寺の僧職を輩出した伊美氏と岩脇寺の関係がうかがえよう。

周辺の歴史的環境

岩脇寺周辺における聞き取り調査の結果、以下のとおり成果が得られた。

岩脇寺に隣接する伊美氏宅は「ヘヤ」と呼ばれ、かっては岩脇寺の庫所であったと伝えられている。また、伊美政男氏宅は嶺崎地区にひろがる伊美氏の本家にあたるようであり、かっては古文書類を所蔵していたとのことである。現在の岩脇寺はかっては、度々、水害に遭い、寺として機能し得なかった事態にみまわれたようであり、伊美政男氏宅が周辺の民家よりは高地に位置するため、仏像その他の関係品が持ち込まれ、緊急時の寺としての機能を果たしていたと伝えられている。

註1　岩脇寺に残されている『寺院所有物明細帳』には明治42年に記録されたものと、昭和15年に記録されたものがみられる。後者の記載内容は基本的には前者と全く同じであるが、明治42年から昭和15年に新たに建設された建物を付け加えている。よって以下で出典を出す場合、作成年度により両者を区別して扱いたい。

写真9
岩脇寺遠景
（南から）

写真10
岩脇寺本堂近景
（昭和50年頃、
伊美正文氏提供）

写真11
岩脇寺護摩堂跡

写真12
六所権現

写真13
岩脇寺奥の院

写真14
岩脇寺奥の院横
石仏群

写真15　岩脇宝塔

写真16　岩脇寺宝篋印塔

写真17　岩脇宝塔周辺五輪塔群

写真18　伊美家旧墓地

写真19　伊美家墓地

写真20　淨眼和尚の墓碑

写真21　澄賢和尚の墓碑

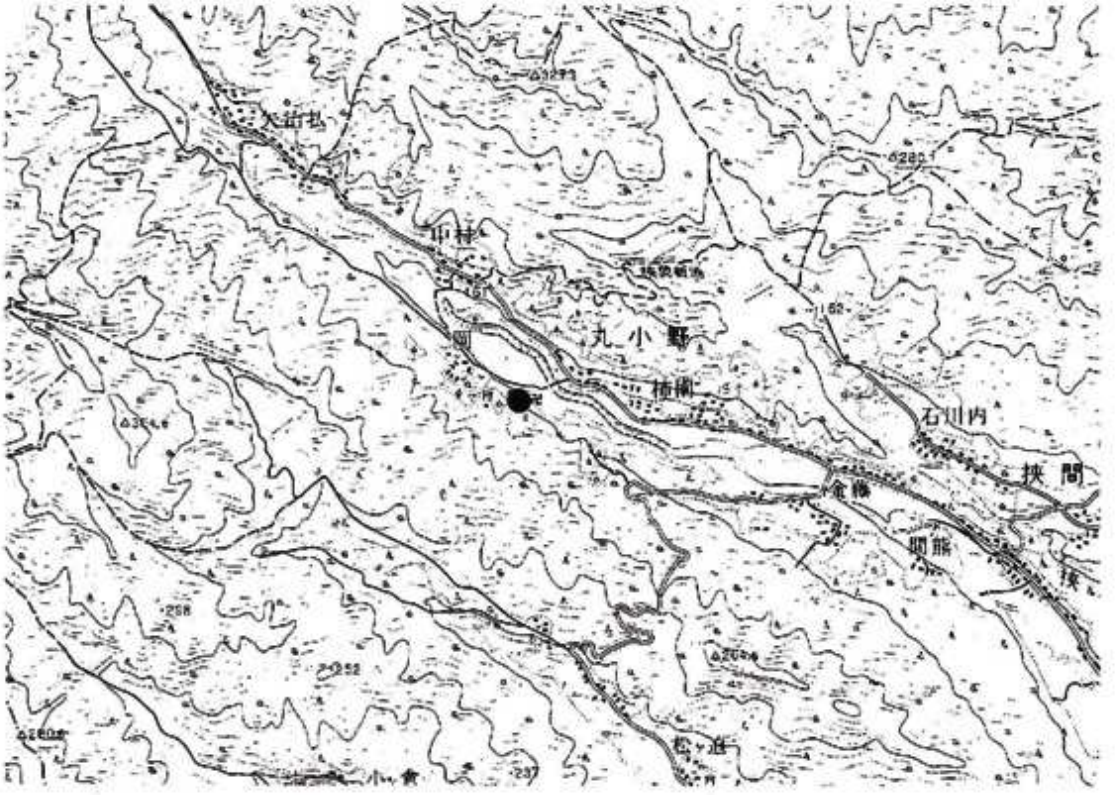
Ⅲ 丸小野寺

中山分末寺である丸小野寺は武蔵町大字丸小野に所在する。両子山の放射谷のひとつである武蔵川流域の狭隘な谷の上流域の南尾根中腹に位置している。

丸小野寺に関する文献史料は第3表に示したとおりであるが、その初出は嘉元2年（1304）の「六郷屋山例講谷役配分注文」に「六郷屋山例講谷役配分注文事 二月ハ両子寺丸小野寺」とみられる。これに続き建武4年（1337）の史料がみられ、鎌倉時代末～南北朝期にかけての記録に現れていることがわかる。ところで、明治末期に丸小野寺の住職であった豪諦によって編纂された『丸小野寺記録編纂材料』によれば養老年間、仁聞菩薩の開基であり、往古には丸小野村字岡の東に堂宇があり、中山東光寺と号していたとされている。戦国期には大友の争乱にあい、その後久しく荒廃していたが、寛文年中（1661～72）に大東の出身である大楽院豪全法印により中興され、現在の境内に再建し、医王山丸小野寺と改称したとされる。その際に本尊を不動明王に改め、旧本尊である薬師如来を講堂に移し、浄念がこれに彩色を施し、加えて日光・月光・十二神将を寄進したと記されている。

参　　道

武蔵川から講堂まで約250mにおよび参道が続いている。まず本堂前に向かう急傾斜の坂道は



第11図　丸小野寺位置図（縮尺1：25,000）

第3表　丸小野寺関係文献一覧表

年　号	出　典	記　載　事　項	備　考
嘉元2年 (1304)	六郷屋山例講谷役配分注文	六郷屋山例講谷役配分注文事 二月ハ両子寺丸小野寺	長安寺文書
建武4年 (1337)	六郷山本中末次第並四至等注文案	中山一丸小野寺　限東辺道〔鳥〕限南鵜巣ノ辻尾　限西横ケ尾辻　限北ツヱ嶺〔ノ〕 委院主相伝證文〔置〕仁明白也	永弘文書
仁安3年 (1168) ※但し後世の作	仁安三年六郷二十八山本寺目録	中山分末寺丸小野寺	太宰管内志
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	六郷山定額院主目録	良医山丸小野寺院主両子寺支配御堂ノ徒六箇所	太宰管内志
天明年間 (1781～1789)	天明年中六郷山寺院名簿	武蔵郷丸小野村医王山丸小野寺　杵築領　青蓮院末一鎮守三所権現一講堂薬師十二神将一附属菴ノ地蔵寄附一段十二歩一石二斗七升八合三勺　山林境内一町四方	太宰管内志

幅約５ｍの石畳で造られており、本堂境内を越えたところで西方に折れ曲がり幅約１ｍの小道になる。現在、ここにおいて林道の敷設により参道が分断されているが、本来は講堂まで続いていた。林道を横切りさらに上方に進むと左右に現在、杉林・くぬぎ林からなる平坦地が連なり、天満宮の鳥居前に至る。現在、ここには林道が取り付けられており、コンクリート舗装された駐車場がひろがるが、本来は鳥居前に至る参道がここから枝分かれし、講堂前の石段に延びていたようである。

本堂・庫裡・山門・境内

本堂・庫裡は桁行11間、梁行5.5間であり、屋根は寄棟造りで本来は茅葺きであったものを、現在はトタン葺きで覆っている。本堂・庫裡は寺歳の文書から10代の密浄院豪證により文久２年（1862）に改築されたものであることがわかる。また、山門は瓦葺きの四脚門であるが、築造年代がわかる資料は残されていない。

参道から境内にのぼる石段の左側には、現在、国東塔が１基みられる。本来は講堂横の板碑と並んで建てられていたものであるが、昭和20年代に山門横に移動したものである。

講　　堂

本堂から参道を丘陵上方に登ると、歳神社をはじめとした神社地に隣接して講堂が南面して位置する。桁行５間、梁行５間であり、屋根は切妻造りの瓦葺きであるが、当初は茅葺きの宝形造であったようである。講堂には宝永５年（1708）建立を記す棟札が残されており、これにより講堂の築造年代がわかる。また、石段の銘文から享保15年（1730）、宥泉（３代見生房看泉か？）により造られたことがわかり、この石段の上方の石灯籠には享保４年（1719）の紀年銘が、また、下方の石灯籠には寛延４年（1751）の紀年銘がみられる。

講堂のコーナーの丘陵側には板碑２基が、また、講堂裏側の丘陵側には宝篋印塔が１基それぞれみられるうえ、現在、丸小野寺山門横の国東塔も昭和20年代に板碑の並びで立てられていたものを移動させたことが伝えられているため、中世期の石造物はすべて講堂周辺に存在していたことがわかる。

２基の板碑は両者とも、中央部から切損しておりセメントで接合している。現在では板碑身部の銘文はほとんど判読できないが、昭和30年の調査では両者とも中央に大きく「南無妙法蓮華経」とあり、向かって左側の板碑には「康永元年（1342）」、右側の板碑には「康永二年（1343）」の紀年銘が見られたとされている。[1]

三所権現

講堂敷地の南側から丘陵上方に石段が延び尾根上に約100㎡の平坦地を造作し、石祠の三所権現が中央に位置している。この石祠には昭和28年（1953）に建てられたものであり、石祠の周囲には、2.5×３ｍの方形の石列が確認でき、本来は木造の社殿が建てられていたことが、三浦君夫氏の話からもわかる。現在、丸小野寺には三所権現建立の棟札が残されており、それをみると、天明４年（1784）に６代住職、実応のときに建立されたことがわかる。三所権現の社殿に関連して、その前面に２基の石灯籠が建てられており、銘文から浄明院（５代住職、静明院豪秀か？）

により、宝暦8年（1758）に造立されたことがわかる。また、三所権現に参拝する石段にも銘文がみられ、享保17年（1732）に造られたことがわかる。

旧本堂伝承地

講堂の西方約100mの丘陵斜面に造作した約1,500㎡の平坦地には「大屋敷（オヤシキ）」というシコナが残り、地元では昔、寺院が存在していたという伝承が残されている。現在は樅林になっており、一部に集石がみられるものの意識的なものかどうかは明らかでない。『丸小野寺記録編纂材料』には岡ノ東に中山東光寺という寺院が存在していたとされている。ここは小字岡の東の位置にあり、『丸小野寺記録編纂材料』にみられる中山東光寺が当地に存在していたものかもしれない。この平坦地の丘陵上方には五輪塔・宝篋印塔の部材が集積されている箇所がみられ、また、この平坦地の石垣前面の幅約1mの小道は講堂に続いている。

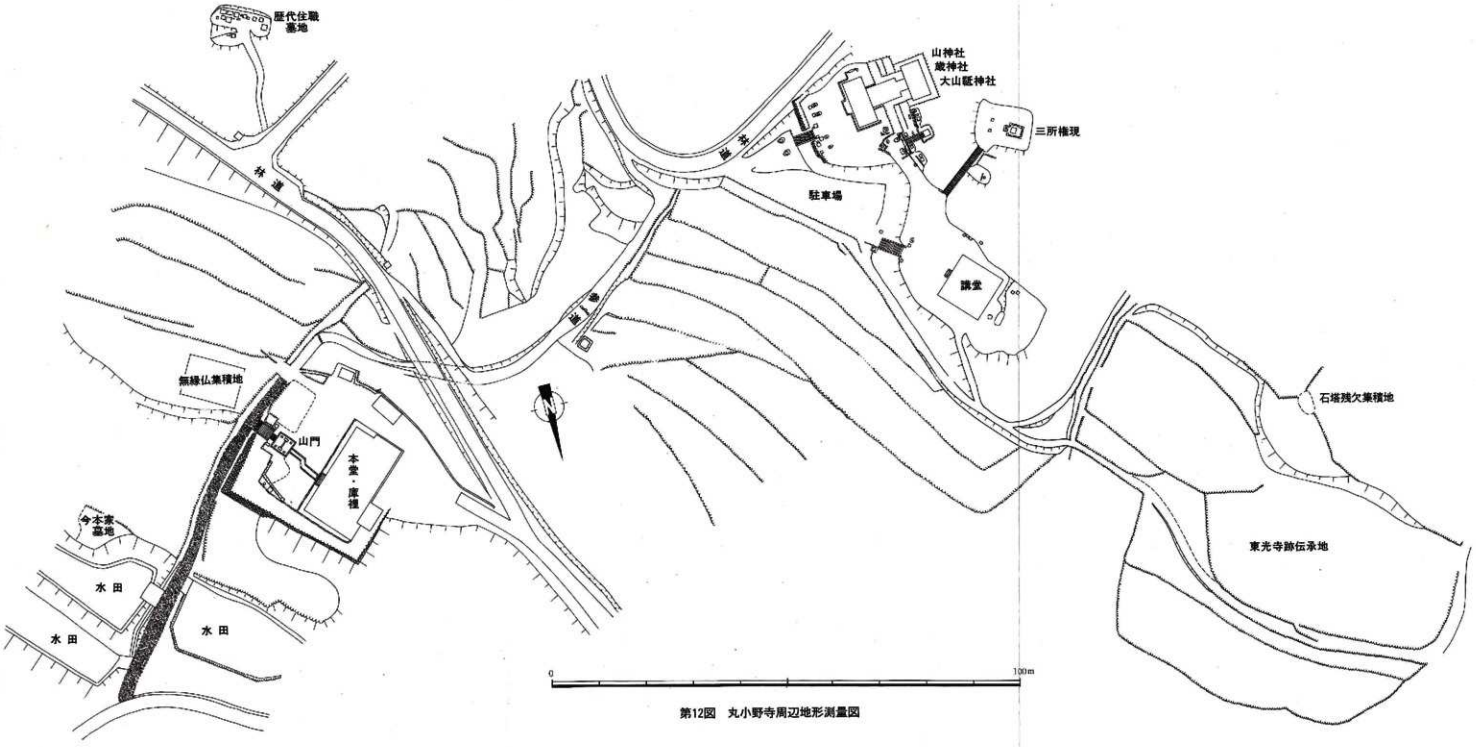
墓　　地

丸小野寺本堂の南方約100mには丸小野寺歴代住職の墓地が営まれている。現在は林道の分岐点から細い坂道が続いているが、林道敷設前は本堂境内横の参道から分岐し講堂に向かう道と墓地に向かう道に分かれていたようである。

墓地は上下2段の平坦地に営まれており、上段は約48㎡に11基が下段は約15㎡に3基が営まれている。墓石は紀年銘から向かって左奥から右奥にかけて順次建てられ、以後はその前面に建てられていることが分かる。また下段は住職ではなく住職の血縁者のための墓地のようである。

上段の墓地において最も古い墓碑は、左奥から2基目の浄念の墓碑であり、元禄4年（1691）の没年が記されている。また、丸小野寺中興の祖といわれる豪全の墓碑は浄念の隣に位置し、この墓地が丸小野寺中興に際して造作されたものであることがわかる。住職の墓碑のほとんどは無縫塔であるが、なかには笠塔婆の形式をもつものや配石墓の中央に一石五輪塔が建てられているものもみられる。なお、歴代住職すべての墓碑がこの墓地に建てられているものではなく、歴代住職17代のうち確実には8基を数えるにすぎない。

注1　大分県教育委員会『六郷満山関係文化財総合調査概要（二）』1977年



第12図　丸小野寺周辺地形測量図

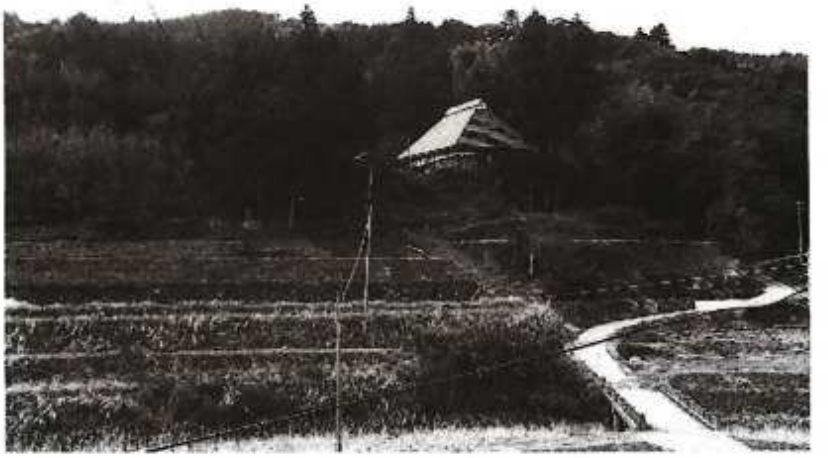


写真22
丸小野寺遠景
（北から）

写真23
丸小野寺参道
（北から）

写真24
丸小野寺境内
（南から）

写真25
丸小野寺講堂
（南東から）

写真26
三所権現

写真27
丸小野寺墓地

写真28　丸小野寺講堂横板碑

写真29　丸小野寺講堂裏宝篋印塔

写真30　丸小野寺山門横国東塔

写真31　旧本堂伝承地裏石塔残欠

Ⅳ　金剛山報恩寺

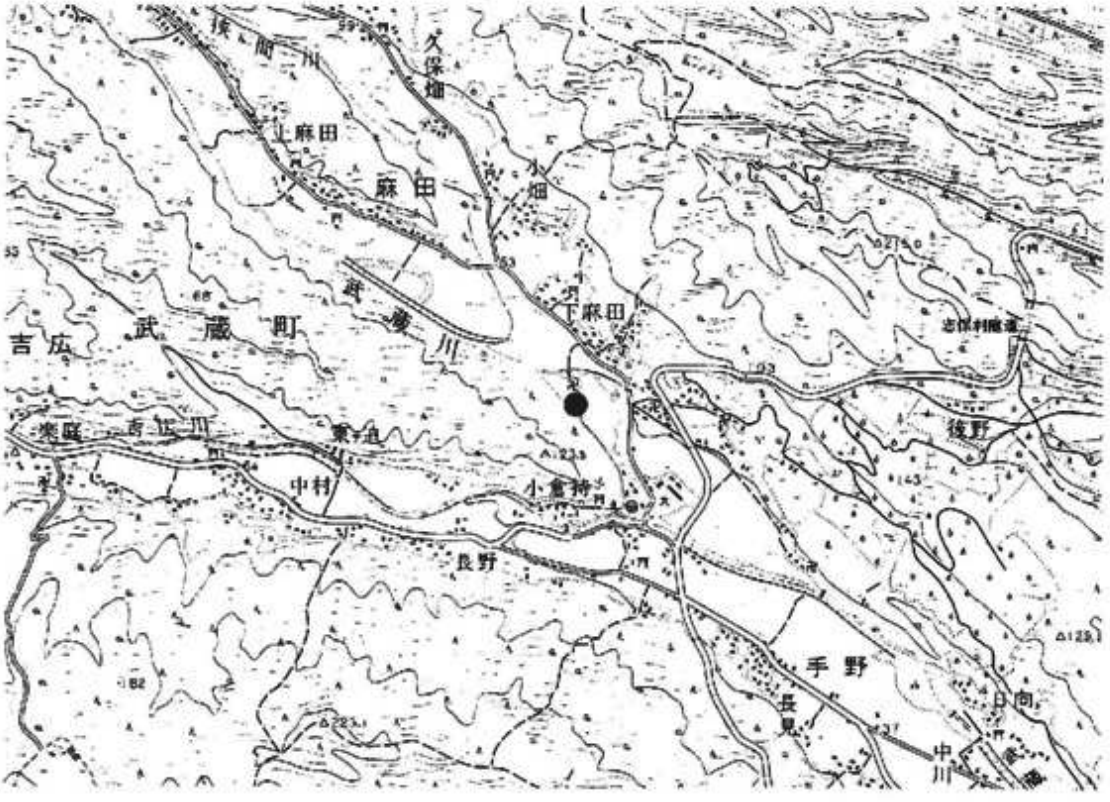
六郷山寺院の末山末寺のひとつである報恩寺は東国東郡武蔵町大字麻田に位置する。北側の武蔵川、南側の丘陵部に挟まれた平坦地に東面して存在し、わずかながら前面には水田、背後に畑地がそれぞれ広がる。また、寺域に隣接して２軒の民家が存在するだけの極めてコンパクトな空間に報恩寺はみられる。

「寺院明細牒」には以下のように記されている。

抑々当山者養老年中仁聞菩薩之開基也。仁聞自彫摸本尊及侍仏之霊容以安置焉。然而大友氏没落際罹兵火堂塔総委灰塵。独其聖像　然存矣。可謂不可思議。元和中有可春者。自奮志研精再経営堂宇。稍得復旧以還世々法脈不絶、鐘梵伝於今云爾。

これによれば、養老年間に仁聞菩薩によって開かれと伝えられている。後に大友氏没落の際には兵火に罹り、堂塔は焼け落ちたが、諸菩薩は事無きを得たとする伝承をもつ。また元和年間（1615～24）には可春上人により再興され、以後、法燈は絶えていないとされている。

天保九年（1838）三月二十二日には火災のため本堂が焼失したが、安政年間（1854～59）に再建されている。



第13図　報恩寺位置図（縮尺1：25,000）

第4表　金剛山報恩寺関係文献一覧表

年　号	出　典	記　載　事　項	備　考
建武4年 (1337)	六郷山本中末次第並四至等注文案	末山末寺…一報恩寺…報恩寺　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]	永弘文書
応永5年 (1398)	報恩寺鰐口銘	奉施入　豊後国武蔵郷麻田村金剛山報恩寺観音堂者也 応永5年3月18日　十方檀那敬白	
仁安3年 (1168) ※但し後世の作	六郷二十八山本寺目録	末山分末寺…金剛山報恩寺	太宰管内志
天明年間 (1781～11789)	天明年中六郷山寺院名簿	武蔵郷麻田村金剛山報恩寺杵築領　山門末境内有＝仲哀天皇神功皇后之陵－本尊阿弥陀三尊観音堂聖観音　一鎮守三所権現宮一鐘楼門　除地田畑四反一畝廿七歩高四石六斗二升一合五勺山一町三段内三　寄附	太宰管内志
寛政10年 ～享保3年 (1798～1803)	豊後国志	報恩寺　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]	
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	六郷山定額院主目録	麻田山報恩寺　[illegible]　院主大嶽任之人徒六箇所	太宰管内志

山門・鐘楼

報恩寺参道の石段を上ると二間四方の山門がみられ、その上部には三間四方の鐘楼がのる。明治22年に再建されたものである。

本堂・庫裡

南側の本堂と北側の庫裡が一体となった建物であるが、安政年間に再建されたものを一部、増改築したものである。

観　音　堂（講堂）

桁行三間、梁行四間を測る建物であり、慶応年間（1865～68）に再建されたものである。観音堂の基礎を区画する現在の外護列石の内側には、正面の一部に以前の観音堂を区画していた外護列石と思われる石列がみられる。報恩寺に所蔵されている県指定有形文化財である鰐口には「奉施人豊後国武蔵郷麻田村金剛山報恩寺観音堂者也応永五年三月六日十方檀那敬白」の銘文がみられこの鰐口が観音堂のものであることから、応永五年（1398）には観音堂が存在していたことがわかる。

報恩寺旧墓地

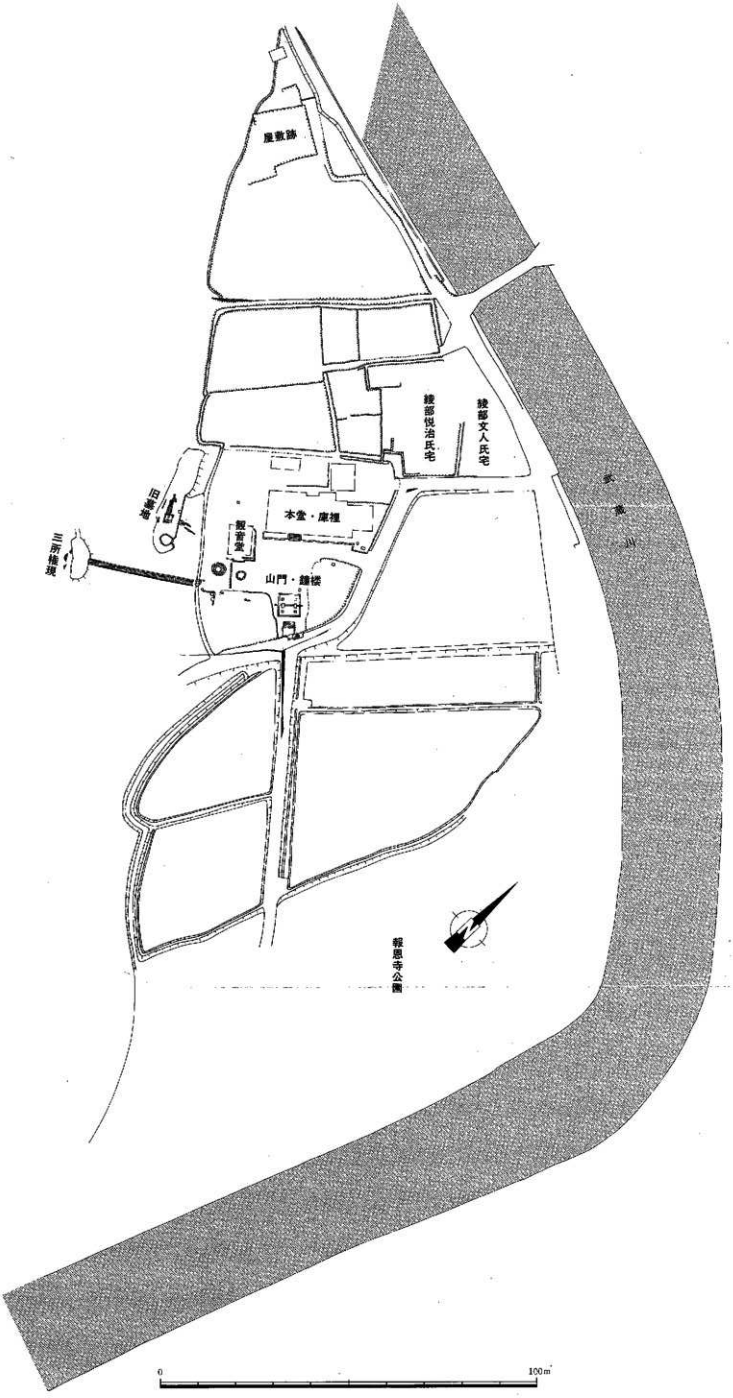
本堂と観音堂の南側の丘陵裾部に平坦地を造作して墓地を形成している。墓地に至る石段の前面には列石による墓道の区画が確認でき、その方向は観音堂の前側に延びている。石段の正面には横2.5m、奥行2.1mの石列の区画があり、区画内の東側に宝塔が西側に入峰石がみられる。その西側には前後２列に高さ50～110cmの21基の五輪塔群の並びが認められる。その西側には石殿の屋根部分のみが地上に置かれており、五輪塔群西端の前面には弥陀三尊陽刻石と五地蔵尊陽刻石が置かれている。また、正面奥の丘陵端には３基の板碑が立てられている。五輪塔群の約1.2m後側の丘陵付近には長さ2.7mにわたり河原石の石列が認められたが、その機能などは明らかでない。なお、墓地東側には炭窯が残っている。

報恩寺墓地

報恩寺より約100m後方の丘陵斜面には配石墓を中心とした歴代住職の墓地が残る。ここでは丘陵斜面に平坦地を数面削平し、墓地を造成している。低い方から２面は報恩寺住職の墓地であり、配石墓を中心に近世の墓標が一部に残るが、上段の墓地には報恩寺中興の祖と伝えられる可春上人の墓が一段高い石組の上に建てられている。この報恩寺住職の墓地の上方にはさらに数面の墓地が造成されており、これらは麻田村の庄屋であった綾部氏の墓地である。可春の出自が綾部氏であることから、この墓地の形成過程は興味深い。

三所権現・祇園牛頭天王・稲荷大明神

観音堂の前面を横切り、「大権現」の石鳥居をくぐると長い石段が続く。石段上には約50㎡の平坦地がみられ、正面の崖肌に龕状に彫り込まれた箇所が３カ所見られ、中央に３基の石祠が左右に１基ずつの石祠がそれぞれ安置されている。中央の３基の石祠は三所大権現であり、左右は祇園牛頭天王・稲荷大明神であると伝えられている。いずれの石祠も同様な形態を呈し、表面には赤色顔料か塗られていたものとみられるが、長年の風雨により退色している。この石祠群の前



第14図　報恩寺周辺地形図

の平坦地を西側に登る小道があり、約10m程登ると地元において大岩権現と呼ばれ、祀られている巨大な岩がみられる。

石　造　物

「大権現」の石鳥居の東側に２カ所の石造物がみられる。鳥居側には自然石に龕状の彫り込みを穿ち、中に自然石を安置したものが立てられている。この自然石の下には方形の石が置かれ、正面に「文政十（1827）丙亥年五月吉日」の銘がみられる。また、その東隣りには板碑がみられる。高さ約120cm、厚さ約80cmの自然石の正面に縦49cm、横35cmの長方形を３cmの深さで彫りくぼめられており、上方中央にキリーク（弥陀）、その下方の左右にサ（観音）・サク（勢至菩薩）の弥陀三尊の種子が彫られている。このほかにもその下方に刻銘や墨書がみられるが、判読できるものではなかった。

なお、観音堂の前には大正13年建立の石幢（八十八ケ所塔）がみられる。

写真32
報恩寺遠景
（東から）

写真33
報恩寺本堂・庫裏

写真34
報恩寺観音堂

写真35
報恩寺旧墓地

写真36
三所権現鳥居

写真37
報恩寺異形板碑

写真38
報恩寺石幢

写真39
報恩寺墓地
（その１）

写真40
報恩寺墓地
（その２）

写真41
可春上人の墓碑

V　石立山岩戸寺

末山分本寺である石立山岩戸寺は東国東郡国東町岩戸寺に位置する。来浦川が走る谷の奥部である大字岩戸寺から北側に小さな谷が延び、その谷奥に岩戸寺が所在する。

現在に残る遺構としては、橋をわたり右折すると六柱社に向かう参道に続くが、まず、石段をのぼると文明10年（1478）銘の石造仁王が左右にみられる。西側の中覚坊跡と伝えられる畑地を横にしながら進むと、東側に本堂・庫裡・鐘楼・山門がみられる。この一角は大門坊跡と伝えられているが、さらに、その上段には院主坊跡・一之坊跡と伝えられる畑地が左右に位置している。ここから参道の石段をのぼると、石灯籠と石鳥居がみられ、西側の露頭岩斜面に墓石をはじめとした石造物が数基建てられている。院主坊跡の上段の平坦地には現在、社務所の建物が残る。また、県指定有形文化財の岩戸寺石幢と岩の上に国指定重要文化財の岩戸寺宝塔がみられ、参道を挟んで反対側の岩上には板碑・国東塔がみられる。ここから石段が長く続き、その西側には寄棟造りで茅葺きの講堂があり、周辺には宝篋印塔・国東塔・五輪塔などの石塔類がみられる。

参道奥にはコンクリート製の奥の院（薬師堂）が建てられている。コンクリート製の奥の院の中には厨子が安置されているが、奥の院の背後には岩肌が大きく抉られ、洞窟状を呈している。この下部には溝やピットが岩肌に彫られているため、本来はこの位置に奥の院が存在していたものであろう。また、奥の院の東側の岩肌の続きには鬼岩屋や明賢洞がほられており、西側には六

第15図　岩戸寺位置図（縮尺1：25,000）

第5表　石立山岩戸寺関係文献一覧表

年　号	出　典	記　載　事　項	備　考
建武4年 (1337)	六郷山本中末次第並四至等注文案	末山一岩戸寺　限東リヤノ本　限西沙丹塚美尾　限南樫宗薗下尾鼻　限北小市良ノ谷 委院主所持證文仁分明也　但今者伊勢民部入道押領	永弘文書
文明10年 (1479)	岩戸寺石造金剛力士像銘	奉造立豊後国六郷山岩戸寺仁王之事 院主藤原都登丸 文明十年戊戌十月二日 大願主豪範 作者清普大門坊 真蔵坊 中覚坊 一之坊 左衛門次郎 弥三郎 助太郎 奉造立豊後国六郷山岩戸寺仁王之事 院主藤原都登丸 文明十年戊戌十月二日 大願主豪範	
文明10年 (1479)	岩戸寺石幢銘	豪範為現世安穏 後生善処 権少僧都豪隆為証證菩提 弟子敬白 文明十年戊戌十月九日	
延享元年 (1744)	豊鐘善鳴録　第5巻	釈明賢者仁聞菩薩神足也性資強健力行抜群一時帝詔求聞公所奉不動像聞乃命賢賫其像通使朝廷賢笈其像入京朝謁紫宸時門外所之笈飛到賢側賢乃解笈進其像帝拝瞻之勅侍臣曰此像威霊天下無比唯留風　屋俗称乗物門軸上彫者目鼠也　宜其逼此矣賢乃還豊復命遂居石立山岩戸寺守聞之先業而終焉是以世人称其像曰無風　不動也	
仁安3年 (1168) ※似し後世の作	仁安三年六郷二十八山本寺目録	流通分末山十箇寺石立山岩戸寺	太宰管内志
文化元年 ～天保12年 (1804～1841)	六郷山定額院主目録	天ノ岩戸寺徒十二房岩戸寺三十仏三十番神	太宰管内志
天明年間 (1781～1789)	天明年中六郷山寺院名簿	國東郡岩戸村岩戸寺 公領山門末一本堂薬師一講堂弥陀一末社四御免地高二石七斗一升山林二町四方などあり岩戸寺村岩戸寺は辰巳ニ向へり一町後に講堂あり四間四面なり本尊薬師仏なり鬼会は正月七日にあり六所権現相殿客人大明神南向なり鳥居ノ正面にあるは薬師なり参ル左は権現なり拝殿二間四面許なり石ノ二王あり元文二年関東より岩戸寺村ノ内寺内一段五畝十一歩高一石二斗四升五合九勺御寄附あり　其状は鶴島大右ヱ門より大門坊に賞る　又同村内開発地一段八畝五歩半高一石九斗一合五勺六所権現へ御寄附あり　此状は六所権現の支配人に賞る　當村内にある末菴新徳ノ阿弥堂 小屋園ノ金剛童子毘沙門 三十仏 馬場に古杉あり前に谷川あり　川より社まで七八十間あり　鳥居ノ前に石ノ二王あり東方なるが背面に文明十年云云 豊後国六郷山岩戸寺云云 十月十二日	太宰管内志
寛政10年 ～享保3年 (1798～1803)	豊後国志	岩戸寺　在国東郡岩戸寺村　号石立山	

所権現が位置している。

以上、現在の岩戸寺周辺にみられる遺構を概観してきたが、現状での伽藍施設の遺存は六郷山寺院においても比較的残りのよい寺院のひとつに数えられよう。以下では各遺構の調査において得られた事項を述べたい。また、今回の調査において岩戸寺周辺のみではなく、比較的離れた位置において坊跡の存在が確認でき、これらもあわせて述べたい。

六所権現（六柱社）

岩戸寺周辺の諸堂の最高所に位置し、その背後には岸が屹立している。現在の社殿は近世末に建築された流造軒唐破風付きであり、その前面に桁行7間、梁行3間の拝殿がみられる。現在はこの前面に石垣を築き、西側側面に薬師堂前から参拝する石段が2箇所につけられている。しかし、岩戸寺住職の話によれば、これらの石段は大正9年に付けられたものであり、本来は拝殿正面に石垣が付けられ講堂北側を通り六所権現に参拝していたそうである。そのため本来は奥の院と六所権現が隔絶していた様相を呈していたことがわかる。大正9年の石段築造以前には奥の院西の享保8年（1723）銘石灯籠奥に方形の石敷区画が存在し、六所権現が本来、女人禁制であったため、ここにおいて女性が六所権現を参拝したそうである。大正以前は現在の拝殿まえの広場がさらに低く、この位置にかっての拝殿が存在しており、前面の石垣も現在よりは低いものだったそうである。

奥　の　院（薬師堂）

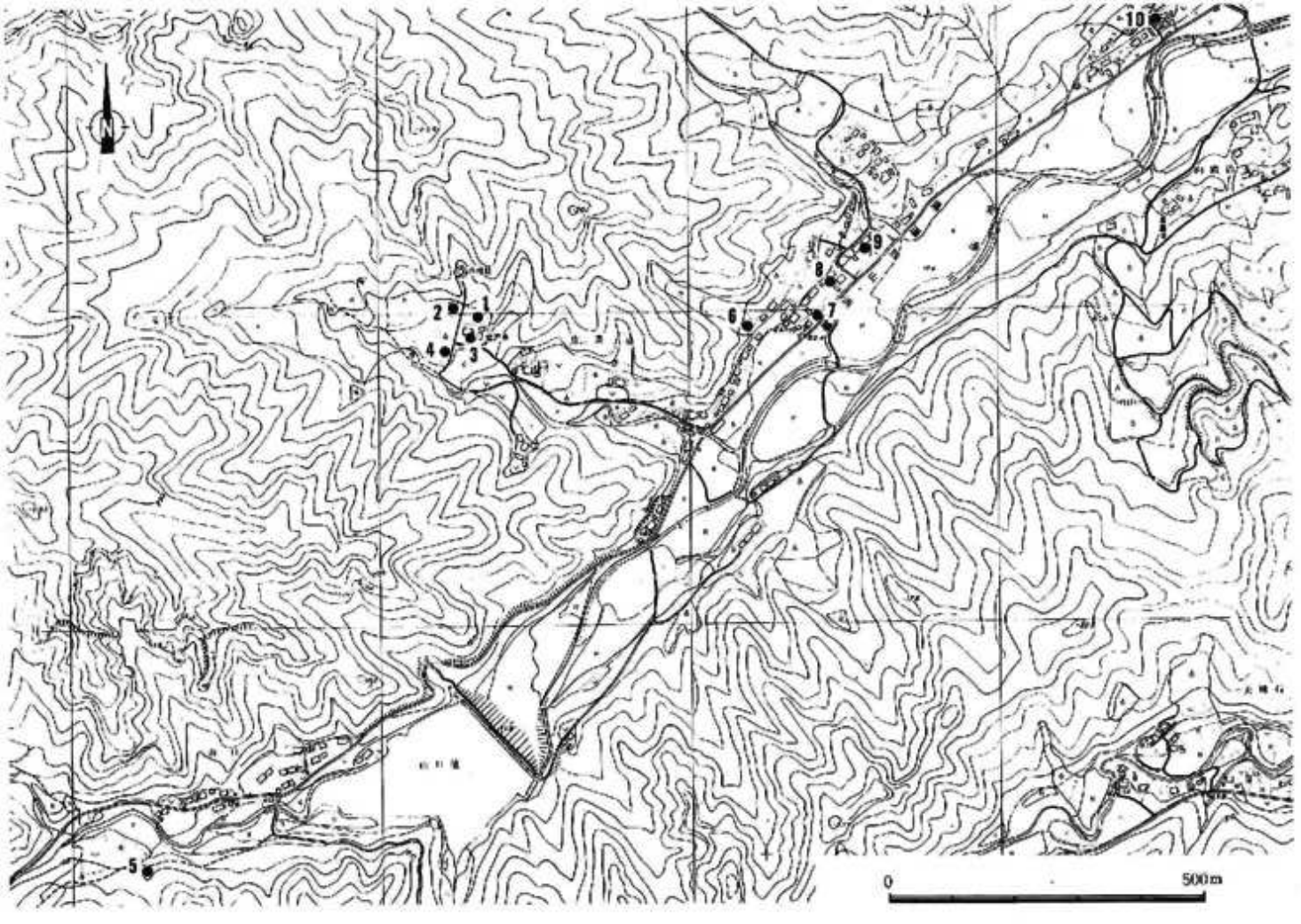
現在の奥の院はコンクリートブロック製耐火耐湿構造平屋建であり、昭和45年に建築されている。奥の院内には天保14年（1844）建築の厨子が置かれ、厨子内には平安時代末につくられたとされる県指定有形文化財の木像薬師如来座像が安置されている。

現在の奥の院の後側には岸内に洞穴状の空洞を穿ち、下面にはU字形の溝や4基の横並びのピット状の彫り込みが岩上に穿たれており、建て替えが行われたと思える複数時期の奥の院の存在が想定できる。なお、洞穴最奥部には現在、異形の五輪形を呈した丸太と安永7年（1778）銘の石灯籠が置かれている。奥の院石段前の平坦地には石灯籠が7基建てられており、これらはいずれも近世でも18世紀前半の紀年銘をもつものが多いが、なかには元和4年（1618）銘の石灯籠がみられる。

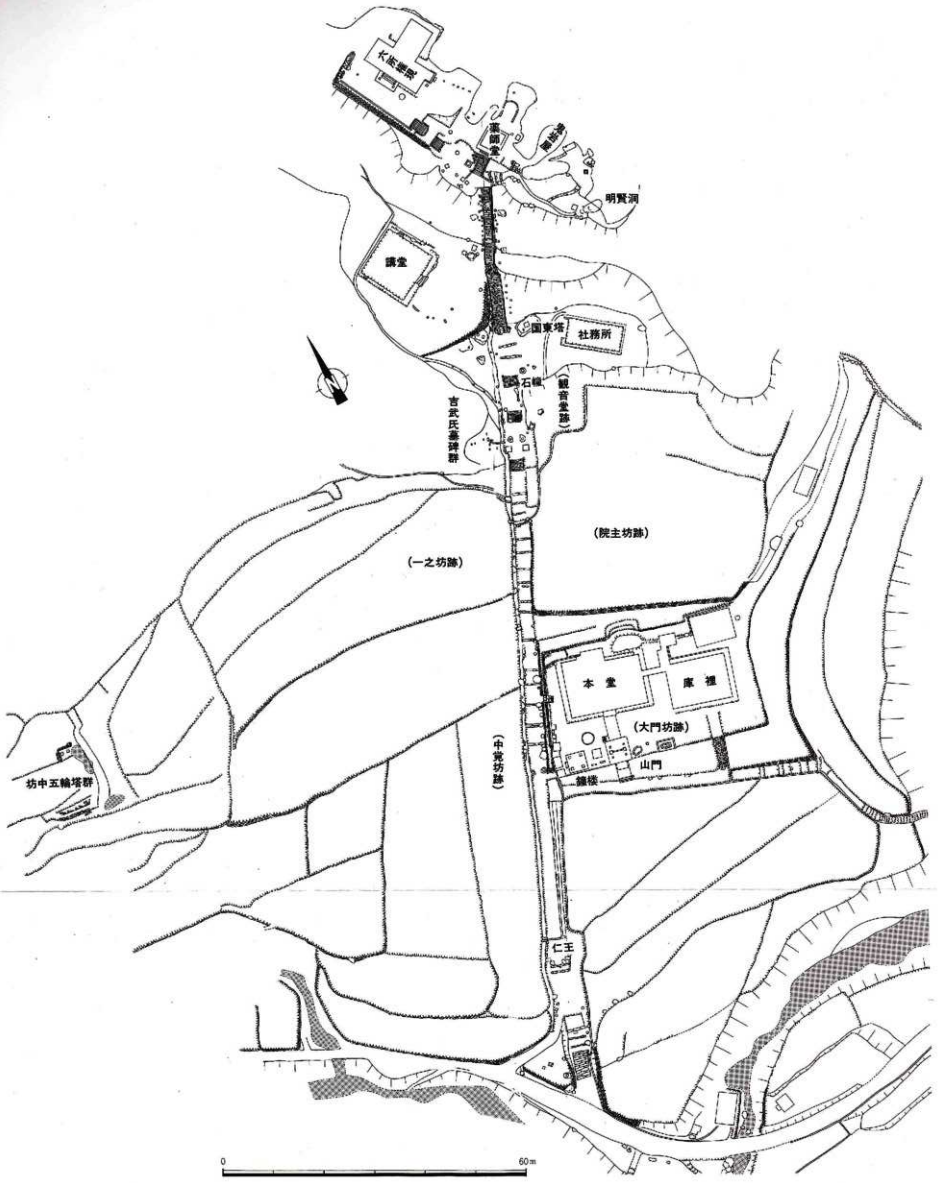
講　　堂

間口6間、奥行6間で屋根が寄棟造り茅葺きの建物である。講堂に関しては延享5年（1748）銘の棟札が残されているが、講堂の柱に嘉永6年（1853）の峰入りの際の墨書がみられ、講堂の建築時期はこのころであると推測できる。

講堂の前面の参道横には宝篋印塔が1基みられるが、昭和54年の境内測量図にみられない石塔が4基、現在確認できる。講堂北側の丘陵斜面に一石五輪塔と国東塔が、また、講堂南側に国東塔と板碑がそれぞれみられるが、これらは近年、大分県別府市在住の林氏が持ち込んだものであり、本来、岩戸寺に存在していたものではない。



第16図　岩戸寺周辺地形図及び坊跡配置図
1．院主坊跡　2．一之坊跡　3．大門坊跡　4．中覚坊跡　5．三十仏　6．新徳阿弥陀堂跡
7．西の坊跡　8．東の坊跡　9．中の坊跡　10．迫坊跡



第17図　石立山岩戸寺周辺地形測量図

(本図は昭和54年の真野和夫・岩本仁慶・栗田勝弘各氏による地形測量図に一部加筆したものであり、現況とは異なる部分もみられる)

社　務　所

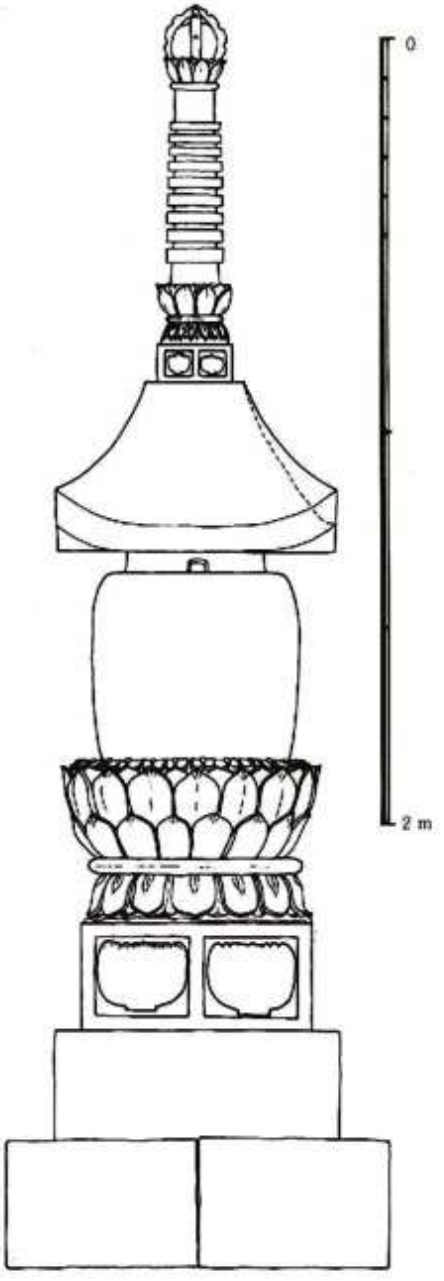
講堂から参道を一段降りた地点には、六所権現の社務所が現在みられる。この前から奥の院前に長い石段が続くわけであるが、石段にかかる両側には大きな岩がみられ、東側の岩上には国指定重要文化財である弘安6年（1283）銘の岩戸寺宝塔（国東塔）がみられ、この岩に立て掛ける形で板碑が1基みられる。また、この岩の南側側面には高さ約30cmの石仏が陽刻されており、その尊像は不明であるが、合掌している姿は確認できる。このほかにも猿に似た小さな尊像を浮き彫りしているものがみられるが、きわめて稚拙な彫りである。一方、西側には2箇所に岩がみられ、参道側の岩上には国東塔2基が、その奥の岩上には板碑がそれぞれみられる。また、社務所の入り口付近には文明10年（1478）銘の石幢がみられる。

院主坊跡

社務所の下段に位置する約1500㎡の畑地はかって院主坊が存在していたと伝えられている。伝承では文禄年間に大友の兵火に罹り焼失したとあるが、この畑地から石光住職が採取した資料を実見させていただいたが、土師質土器をはじめとした中世期の遺物であり、火をうけて赤変した遺物も確認できた。石光住職によれば参道奥側の井戸横には、かって十一面観音を納めた観音堂が存在していたようである。明治時代には神仏分離の風潮により六所権現横に薬師如来が安置されていることが適当でないとされ、一時、薬師堂の薬師如来を観音堂におろして安置していたと伝えられている。その後、明治時代末期には本堂前の鐘楼の建てられている位置に移築されていたが、昭和27・28年頃の台風により倒壊し、以後、再建されることはなかったようである。

古墓碑群

旧観音堂と参道を挟んで反対側には露頭岩がみられ、墓碑をはじめとした石造物が建てられている。最上部には「孔慶山宗祐居士神位　慶長十八（1611）癸丑歳　四月二十九日」の銘をもつ墓碑が2基みられるが、墓碑の形式は異なる。この岩上には墓碑や三界万霊塔が合計7基みられ、いずれも近世の紀年銘をもつ。このほかに自然石に龕を穿ち石造地蔵菩薩を安置しているものが1基



第18図　岩戸寺宝塔実測図

みられるが、これは「払地蔵」と呼ばれ、小字払の吉武一族により祀られたものと伝えられている。この石造地蔵菩薩はかって観音堂に納められていたが、観音堂倒壊に際してこの岩上に移動したものである。

また、この露頭岩の下部である排水溝横には高さ約50cmの2体の磨崖仏が陽刻されている。向かって右側の石仏は正面で合掌している姿が確認できるが、左側は風化が著しく、その形容は明らかでない。この磨崖仏の左隣りには高さ約60cm、横約30cmの彫り込みをつくり、中に「　昌久禅門　頓證　為菩提　永禄六年（1563）癸亥十一月□日」の銘が彫られている。

本堂・庫裡（大門坊跡）

院主坊跡伝承地の畑地の下段の平坦地には大門坊が存在していたと伝えられている。本堂は桁行6間半、梁行4間の入母屋造りであり、岩戸寺の記録によれば天保12年（1841）に建てられたことがわかる。かっては庫裡と一続きの建物であったようだが現在は本堂東側に庫裡を再建し、通路で連結している。現在、鐘楼がたてられている位置には前述したように観音堂が移築されていた時期があった。この本堂敷地と参道の間には石垣塀が築かれており、この石垣塀に接して山王社の石祠をはじめ文政5年（1823）銘の徳本上人供養塔や元禄13年（1700）銘の澄圓の墓碑などがみられる。また、石垣塀の上には現在、12体の石仏が置かれているが、このうち3体は観音堂に安置されていたものであると伝えられている。

坊中五輪塔群

院主坊跡と伝えられる畑地と参道を挟んで反対側には一之坊がかって存在していたと伝えられる杉林がひろがる。この一之坊跡伝承地西側の吉武忠臣・吉武サダ子両氏の所有地には多数の五輪塔群がみられる。まず最上部に3基の比較的大きな五輪塔が3基並んで建てられており、その横に板石が積み重ねられているが、これは吉武忠臣氏の父、美常氏が五輪塔周辺の地下を掘り下げたときに集積したものであり、本来は3基の五輪塔の下部に敷かれていたものであると伝えられている。これに接して南側に2列の五輪塔群がみられるが、その遺存状況はきわめい悪い。その、南側にも2カ所、五輪塔群が集積されている場所がみられるが、西側の五輪塔群は斜面に3段の石列をつくり、その石列上に五輪塔を並べた状況が観察でき、その五輪塔も一石五輪塔が多く、本来、造立期の状況がうかがえる五輪塔群であると思える。これに対し、東側の五輪塔残欠群は各部位が別々に集積されており、それぞれの対応関係は全く不明の状況を呈しており、これらは原位置を保つものではなく、周辺地から集められたものであると考えられる。

歴代住職墓地

庫裡裏側から谷部をさかのぼり、西面する丘陵斜面に歴代住職の墓地が営まれている。まず、正面に岩戸寺中興の祖とされる圓海の墓碑がみられるが、これのみ圓海の尊像を石像にしたものであり、このほかは無縫塔か笠塔婆型の墓碑である。この圓海の墓碑の没年月日は宝暦4年（1754）であり、それに先立つ墓碑としては延享2年（1745）の賢秀の墓碑のみであり、他はすべてこれ以降の住職に限られる。それゆえ、この墓地の形成は18世紀中頃と考えられ、前述したように元禄13年（1700）に没した澄圓の墓碑が本堂横に置かれているように、この段階ではまだ墓地

の形成は行われていなかったと考えられよう。

周辺坊跡と堂跡

岩戸寺には前述したように院主坊跡・大門坊跡・一之坊跡のそれぞれの伝承地が参道に沿いみられるが、大門坊と参道をはさみ西側の畑地には中覚坊跡の伝承がある。それゆえ現在の岩戸寺境内には4カ所の坊跡が伝承として残っている。このほかにも岩戸寺集落に坊跡の伝承地が数箇所で確認でき、以下ではそれぞれについて述べる。

大字岩戸寺小字払には新徳坊と伝えられている堂跡がみられる。現在は約4m四方の基礎となる石が並ぶのみであり、その奥部に石仏が　基並べられている。『太宰管内志』「天明年中六郷山寺院名簿」の岩戸寺に関する記載のなかに「末巷新徳ノ阿弥陀堂」とあり、石仏群の中央に比較的大きい阿弥陀立像がみられることからも、これらの石仏群はこの阿弥陀堂におさめられていたものと考えられよう。

また、文殊山の東北麓で山口池奥の南側丘陵斜面に三十仏と呼ばれる岩屋堂がみられる。現在、参道入口には文政5年（1822）銘の石造仁王がたてられており、ここから谷部をのぼる参道は現在ではコンクリート舗装がされている。この参道の奥に石段が続き、三十仏と六所権現の岩屋がみられる。三十仏に所在する鳥居・灯籠・石段など石造物にみられる紀年銘からこれらはいずれも近世期のものであり、中世までさかのぼる石造物はみられない。三十仏御堂も天明3年（1783）に再建され、文久3年（1863）に三十仏の石仏が作られているため、三十仏御堂に残された時期不明の焼仏以外はいずれも近世の所産であることがわかる。建武4年（1337）の「六郷山本中末寺次第並四至等注文案」には末山末寺として「三十佛」と記されており、14世紀中葉の段階にはすでに存在していたことがわかり、近世の作とされる「仁安三年六郷二十八山本寺目録」には末山末寺として記載されていない。『太宰管内志』の「六郷山定額院主目録」や「天明年中六郷山寺院名簿」には岩戸寺の項に三十仏の記載があり、近世段階にはすでに岩戸寺の管理下にあったことがうかがえる。

このほか岩戸寺集落には坊跡と伝えられる民家が4軒みられる。郷司忠芳氏宅の一角には中世後半の国東塔をはじめ近世の墓碑群がみられる。これらは県道文殊・山浜線の拡幅に伴い移動させられたものであるが、所有者である郷司氏宅は「西之坊」であったと伝えられている。また、郷司氏の東側に位置する吉武フサ子氏宅は「東之坊」であったと伝えられ、庭先には石祠をはじめとした石造物が残る。さらに吉武良人氏宅は「中之坊」と伝えられ、庭先には中世後半の宝篋印塔と馬頭観音を納めた石祠が残されている。このほかにも迫義明氏は「迫坊」と伝えられ、庭先には板碑・宝篋印塔・五輪塔など中世の石造物が多くみられる。

写真42
岩戸寺遠景

写真43
岩戸寺講堂

写真44
岩戸寺六所権現

写真45
岩戸寺奥の院

写真46　岩戸寺鬼の石屋

写真47　岩戸寺明賢洞

写真48　岩戸寺宝塔

写真49　岩戸寺宝篋印塔

写真50　六所権現社務所

写真51
岩戸寺石幢

写真52
坊中五輪塔群
（その１）

写真53
坊中五輪群
（その２）

写真54
岩戸寺墓地

写真55
澄圓墓碑・
徳本上人供養塔

写真56
三十仏仁王像

写真57
三十仏・六所権現

写真58
新徳阿弥陀堂

写真59
吉武良人氏所有
宝篋印塔・
馬頭観音石祠
（伝中之坊跡）

写真60
迫義明氏所有石
塔群（伝迫坊跡）

写真61
迫義明氏所有五
輪塔群
（伝迫坊跡）

第3章　調査のまとめと課題

今年度の六郷山寺院遺構確認調査は馬城山伝乗寺・日野山岩脇寺・丸小野寺・金剛山報恩寺・石立山岩戸寺の5カ寺を対象に行ったが、その詳細は前述した通りであるが若干のまとめは以下のとおりである。

馬城山伝乗寺

現在、真木大堂が馬城山伝乗寺であったと伝えられているが、伝乗寺とは本来、どこに位置していたのか、また、中世期の様相はどのようなものであったか極めて不明の部分が多い寺院である。安貞2年（1228）の「六郷山諸勤行並諸堂役諸祭等日録」には真木大堂収蔵庫に納められている阿弥陀如来・不動明王・大威徳明王の記載がみられるが、「種々勤等中絶」とみられるように13世紀前半には寺院としてはかなり衰退している状態が推測できよう。ただし、これには「馬城山」とは記されておらず、「喜久山」とみられ、「馬城山」と初めて記されるのは建武4年（1337）の「六郷山本中末次第並四至等注文案」からである。馬城山とは現在、真木大堂が位置する背後の山であるが、喜久山（聞山）とは馬城山と谷を隔ててその奥の丘陵地帯を指す。

現在の真木大堂には、仏像を除き、本来、伝乗寺に関係すると思われる中世期の遺構遺物はほとんど無い。真木大堂参道である「桜の馬場」の端に置かれていた板碑・石幢も伝乗寺に関係するものかどうかは断言できず、他所からこの位置に移動させられたものである可能性が高い。また、駐車場横の畑地での発掘調査で発見された中世に属すると考えられるピット群もその性格は明らかでなく、寺院と結び付ける確証は全くない。それゆえ近世期の伝乗寺の足跡はわずかながら確認できるものの、移動可能な仏像群を除き、中世期の伝乗寺の様相は今回の調査では全く確認できなかった。

その要因を考えた場合、伝乗寺に関する文献の記載内容から、前述したように13世紀前葉の段階ですでに衰退していたことと、その当時、「喜久山」と呼ばれていたことなどから、本来、他所に存在した伽藍が廃絶し、現在の地に再建したうえ仏像群が移されたということが一つの可能性として考えられよう。しかも、その呼称から馬城山の背後に位置する聞山に存在していた可能性が高いと推測できる。今後、詳細な周辺調査により、その可否が明らかになっていくであろうが、今回の調査ではその可能性を指摘できるにとどまった。また、駐車場横の発掘調査で発見できたピット群のひろがりと性格の解明も今後の考古学的調査に委ねられるものであり、元来、伝乗寺が現位置に存在していたものであったなら、諸堂の配置を確認する考古学的調査も今後の課題とされるであろう。

日野山岩脇寺

岩脇寺は建武4年（1337）の「六郷山本中末次第並四至等注文案」に「日野石屋」として初めて現れる。中世の遺構・遺物として今回確認できたものは、岩脇宝塔と岩脇寺宝篋印塔である。また、その造顕時代は明らかでないものの磨崖六地蔵や尊像不明の磨崖仏も中世期のものと考えられる。

岩脇寺宝篋印塔は岩脇寺の鬼門、岩脇宝塔は裏鬼門とそれぞれ伝えられているが、明治42年の『寺院所有物明細帳』には岩脇寺宝篋印塔のみ記載されており、岩脇宝塔は本来、岩脇寺とは無関係であったようである。岩脇寺宝篋印塔は前述したように宝篋印塔の塔身に五輪塔の空風火輪をのせたものであり、塔身には応永33年（1426）の紀年銘がみられ、また、五輪塔の残欠も中世のものと考えられる。これとともに磨崖六地蔵や尊像不明の磨崖仏も中世後半のものであると考えられ中世期の石造物はいずれも奥の院周辺に集中している。今回の調査では確認できなかったが、『明細帳』に「岩屋六字名号巌面壱号」と記されている。『明細帳』にみられる中世期の遺構が仁聞菩薩の作とされており、「岩屋六字名号巌面壱号」も仁聞菩薩の作とされていることからこれも中世までさかのぼる可能性が高く、巌面にみられるということからこれも奥の院周辺に彫られていたものと考えられるため、中世期の石造物は奥の院周辺に限定できる。「注文案」に「日野石屋」とみられるように中世段階の岩脇寺は現在、奥の院・六所権現となっている岩屋部分のみ寺院として機能していた段階であったと考えられよう。

『明細帳』には大友の兵火による焼失後、浄眼和尚により近世に至り中興されたとされているように近世期になれば、本堂・奥の院周辺にさまざまな石造物に近世の紀年銘が確認できるようになる。当寺を中興した浄眼和尚は伊美氏出身であり、代々の住職も伊美氏から出したものと伝えられているが、現在、旧跡として確認できる講堂跡も含めて本堂周辺の伽藍は近世になって確立したものと考えられる。

今回の調査において解明しえなかったのは、歴代住職の墓地である。中興の祖とされる浄眼和尚の墓碑は伊美氏旧墓地の最奥部に建てられており、また、伊美氏墓地にも澄賢の墓がみられるものの近世の住職の墓はこの２例のみであり、その他の歴代住職の墓碑がどこに存在しているかは今回の調査では確認できず、歴代住職の動向の解明は今後の課題として呈示したい。

丸小野寺

丸小野寺に関しては、嘉元２年（1304）の「六郷屋山例講谷役配分注文」にみられるように、14世紀初頭には既に存在していたことがわかる。現在、丸小野寺の遺構で確実に中世期までさかのぼると断定できるものはみられないが、前述したように４例の石造物が中世期にさかのぼる。国東塔・宝篋印塔も南北朝期に製作されたと考えられているが、２基の板碑には今回の調査で確認はできなかったものの康永年間の紀年銘がみられたようであり、南北朝時代初頭の石造物であることがわかる。国東塔を含めこれらは講堂横にみられ、中世期の石造物は講堂周辺に集中していることがわかる。このほかの石造物をはじめ建立時期の明らかな建物は、いずれも近世の所産であり、歴代住職の墓地も豪全の中興以後のものである。

しかし、『丸小野寺記録編纂材料』に丸小野寺の前身にあたる中山東光寺の存在が記されている。現在、東光寺跡といわれる樔林の裏には中世期の石塔残欠が集積されており、今後の発掘調査における遺構の確認に委ねざるをえないが、東光寺が当地に存在していた可能性は極めて高いものと思われる。東光寺に関しては、国東町田深の西林寺本堂木尊前の偏額にみられる「西林寺御木尊由来」に以下のとおり、記されている。

御本尊座像御丈一尺六寸恵心僧都の御作なり。之此の如来の儀は六郷の内丸小野村に惣名中山より山号を山中山、寺号を東光寺とし寺領三十六石、本堂護摩堂講堂イラカを並べ寺中に坊中の数十二軒御座候所の御本尊なり。唯今は寺跡坊中共に作り畑となり、右の石の□斗り荒々残り御座候

これは東光寺の本尊が西林寺に移された由来の一部を抜き出したものであるが、これによるとこの偏額の製作年代である明和6年（1769）にはもうすでに荒廃していた状況がうかがえよう。これをみると本堂・護摩堂・講堂が存在していた可能性があり、東光寺跡伝承地の石垣前の小道を南方に進めば丸小野寺講堂の側面からのぼる道に続き、講堂については現講堂が再建前には東光寺の講堂であった可能性が考えられる。現在、丸小野寺講堂は享保15年（1730）に造られた石段からのぼり、南面する講堂に向かい、三所権現はその左側から階段をのぼることになる。しかし講堂横の板碑は東面しており、宝篋印塔も講堂の北西隅に位置している。そのため、現講堂が中世期の東光寺の講堂であったなら、現在、講堂の側面からのぼる小道が参道であったと考えられ、講堂が本来は東面していた可能性が考えられる。その場合、板碑と宝篋印塔は講堂の左右奥に正面を向いてそれぞれ位置していたことになり、また、三所権現の参道も講堂の奥側からのぼることになり、石造物と建物とを含めた全体配置としては自然な印象を受ける。再建前の講堂の実態を知りえない現在ではこれはあくまでも推論の域を出ないが、東光寺の伽藍配置を確認することは今後の新たな課題として残された。

また、今回の報告において指摘した東光寺の存在が、丸小野寺の歴史の中で新たな疑問を投げかける結果になった。というのも、「六郷屋山例講谷役配分注文」・「六郷山本中末次第並四至等注文案」など中世期の文献にはいずれも「丸小野寺」と記載されているため、東光寺と丸小野寺が全く同一の寺院か、あるいは別々の寺院か、最も根本的な問題であるが、今回の調査において解明しえず、新たな課題として指摘しておきたい。

金剛山報恩寺

報恩寺は「六郷山本中末次第並四至等注文案」にすでに末山末寺として記載されているため、南北朝時代初期には既に存在していたことがわかる。その伽藍としては、当寺に観音堂の鰐口が残されており、その銘文から応永5年（1398）には観音堂が存在していたことがわかる。

中世までさかのぼる遺構は確実には確認できないが、報恩寺旧墓地の石造物には室町時代末期のものが多く確認できる。これらの報恩寺旧墓地の石塔類は報恩寺に関する墓と伝えられているものの、その実態は明らかでない。確実に歴代住職の墓と確認できるのは由緒に元和年間（1615～24）、当時を中興したと伝えられる可春上人からである。可春上人は綾部氏出身とされており、報恩寺墓地は近世、麻田村の庄屋を務めた綾部氏の墓地の一部に占地されているため当寺と綾部氏との関係は墓地の形成をみてもうかがえる。ただ、報恩寺墓地は2箇所に分かれており、近世前半は綾部氏墓地の一角に、また、近世後半は独自に綾部氏墓地とは離れたところに営まれている。近世後半の墓地は各地の六郷山寺院に一般的な無縫塔を中心とした墓地であるが、近世前半の墓地は僧侶の墓碑は少なく、在家の墓碑が多い。また、特に注目すべきことは、墓碑を有する

場合も有しない場合も拳大から人頭大の河原石を集積した配石墓という点である。その配石墓は方形あるいは方形を連ねた長方形を呈するものが多いが、考古学的調査により、中世にさかのぼるものと把握されている各地の遺構に大変類似している。報恩寺墓地の配石墓について墓碑による紀年銘が確認できる場合を除いてその築造時期は明らかでないが、その遺構数並びに配置から近世をさほどさかのぼるものではなく、古くても中世末以降のものであると推測したい。実は、岩脇寺旧墓地にも配石墓が確認されており、国東半島一帯近世前半の墓地に少なくない形態と考えられ、報恩寺墓地の配石墓群もあわせてこの配石墓の実態の解明は今後の課題とされよう。

石立山岩戸寺

岩戸寺は管見にふれる限りでは、建武4年（1337）の「六郷山本中末次第並四至等注文案」にはじめてその存在がみられる。しかし、この段階には「但今者伊勢民部入道押領」とされるように寺領の押領がみられ、岩戸寺の創建はさらに古くさかのぼることがわかる。一方、岩戸寺に残される石造物には弘安6年（1283）銘の岩戸寺宝篋印塔をはじめ岩戸寺宝篋印塔・坊中五輪塔など南北朝時代に属するものや、岩戸寺石幢・石像仁王・坊中五輪塔群など室町時代に属するものも比較的多く、中世を通じて石造物が作られたことがわかり、その繁栄ぶりがうかがえる。

また、当寺で注目できたことは坊跡の一部の存在が把握できたことである。岩戸寺石像仁王の銘文に「大門坊・真歳坊・中覚坊・一之坊」と、4カ所の坊が記されているが真歳坊を除き、いずれも岩戸寺参道に面してその伝承地が残る。中世期に製作されたと考えられている「定額院主目録」にも十二坊の存在が記されており、その坊も岩戸寺境内だけではなく、ひろく周辺部にも分布していることがうかがえる。今回、岩戸寺集落内において4カ所に坊跡の伝承を確認した。これらの坊跡にはいずれも中世～近世の石造物がみられ、坊跡の可能性は極めて高いと思えるが、それぞれ坊跡とされる民家での聞き取り調査においては、坊の実態に関する伝承はとんど確認できなかった。岩戸寺境内の坊跡を含め、集落内の坊跡のそれぞれの実態を解明していくことが今後の課題とされようが、特に現在、院主坊跡と伝えられている畑地からは中世の遺物が表採できるため、考古学的な発掘調査を含めて、その遺構の確認は中世独自の坊の遺構の実態を把握できる可能性が高いことも付け加えておきたい。

第5章　岩脇寺の法会

（1）修正鬼会

明治前半頃、岩脇寺では修正鬼会を旧正月11日に行っていた。当時は六郷満山西組の住職たちが次のように各寺院を巡回して実施していた。旧正月3日智恩寺・5日応暦寺・6日長安寺・7日天念寺・8日無動寺・9日弥勒寺・10日胎蔵寺・11日岩脇寺・12日西明寺の順である。しかし、岩脇寺では明治35年ごろを最後に修正鬼会は中断している。法会の内容は現在の天念寺修正鬼会とほぼ同様なものであったと思われる。ただ、岩脇寺には講堂がなかったため、護摩堂の前に幕を張り巡らせて実施していたと伝えられている。これは読経などの勤行は狭い護摩堂内で行い、開白以後の香水・四方固・荒鬼等の立役を堂前の広場で行っていたのであろう。タイレシたちの垢離取りは、護摩堂裏の小崎川の淵で行っていたと思われる。

岩脇寺には、①荒鬼面・②災払鬼面・③鈴鬼男面・④鈴鬼女面・⑤荒鬼古面の計5面が伝えられている。①から④までの鬼会面が一組となっており、⑤の荒鬼古面だけは別系統のものである。①と②の鬼面は漆塗りである。角がなく、牙の生えた面貌をもつ。耳は欠落しているが、牛耳状の耳を紐で結び付けていたものと思われる。③と④の鈴鬼面は木地に和紙を貼り、その上に胡粉を塗布する。鈴鬼男面の膚は黄褐色・女面は薄桃色に彩色されている。⑤の古面は一本角に牛耳が装着されていたらしく、角装着用のほぞ穴や耳用の紐穴がある。胡粉地に赤色の顔料を塗布し、眉に墨を塗り、歯は胡粉のまま残す。曲面よりも平面が目立ち、抽象化された造形である。

寸法　①　荒鬼面／面長343㎜・面幅297㎜・面高182㎜。
　　②　災払鬼面／面長360㎜・面幅296㎜・面高185㎜。
　　③　鈴鬼男面／面長198㎜・面幅152㎜・面高 83㎜。
　　④　鈴鬼女面／面長196㎜・面幅150㎜・面高 79㎜。
　　⑤　荒鬼古面／面長298㎜・面幅220㎜・面高152㎜。

（2）六郷山峯入り

六郷山寺院合同の法会として峯入り行がある。最近では平成3年春に行われている。寺の裏の崖上で「散華」といって、行者の身代わりとしてサカキの枝を天空に投げ上げ、同時に神仏を供養するという。初日は、熊野磨崖仏不動明王の前での開白護摩を始まりに、胎蔵寺・伝乗寺（真木大堂）・二宮八幡社・開戸寺（朝日観音・夕日観音）・岩脇寺・富貴寺・智恩寺・鼻津石屋・普賢石屋・妙覚寺・矢立宮などを経て、長安寺で一泊する。岩脇寺には次のような嘉永六年銘（1853）の入峯修札が残されている。

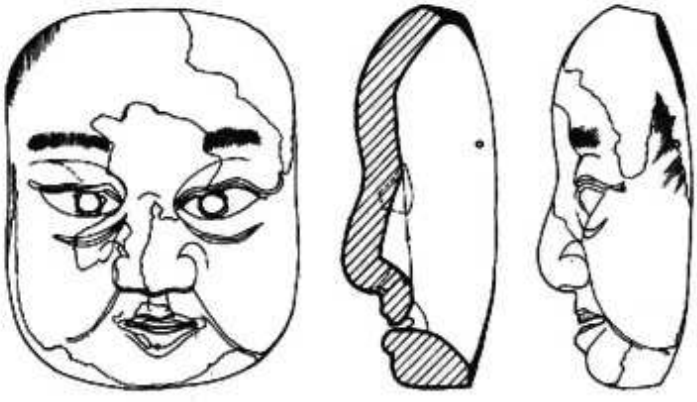
嘉永6年癸丑天	大先達行入寺豪清	文殊仙寺 千燈寺	天念寺 胎蔵寺	大衆
六郷満山仁聞菩薩古跡入峯行者拾一人各結衆初入敬白				
2月13日	後越家両子寺豪千	興導寺 宝命寺	清浄光寺 大聖寺	敬白

(3) 岩脇寺と盲僧

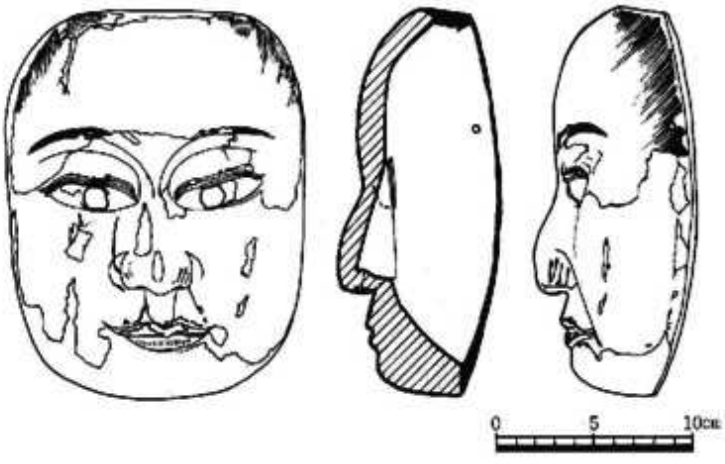
岩脇寺は盲僧たちが立ち寄る寺院であったと伝えられており、他の六郷山寺院ではあまり見られない特色となっている。国東半島の盲僧は、福岡市南区高宮の天台宗成就院が統括する玄清法流の系統である。岩脇寺の住職は代々地元の伊美氏から輩出したと伝えられており、盲僧がどのような立場で岩脇寺に関与していたかは明らかではない。岩脇寺の過去帳には、下記のとおり盲僧と記された僧名が記されており、ここで近在の盲僧たちの供養を行っていたと思われる。

［例］権律師行順大徳	天明9年3月9日	出水村盲僧	(1789／現宇佐市出光か？)
金剛仏子順養大徳	文化5年6月4日	卯地盲僧	(1808／現豊後高田市草地)
権律師真弓大徳	文政9年11月11日	佐々礼盲僧	(1826／現宇佐市佐々礼)
教　傳　大　徳	天保元年6月9日	長洲盲僧	(1830／現宇佐市長洲)
佛　子　賢　浄	明治3年5月9日	木縄盲僧	(1870／現豊後高田市来縄)
佛子観桂大徳	明治12年8月13日	田福村盲僧	(1879／現豊後高田市田福)

第19図　鈴鬼男面



第20図　鈴鬼女面



第21図　荒鬼古面

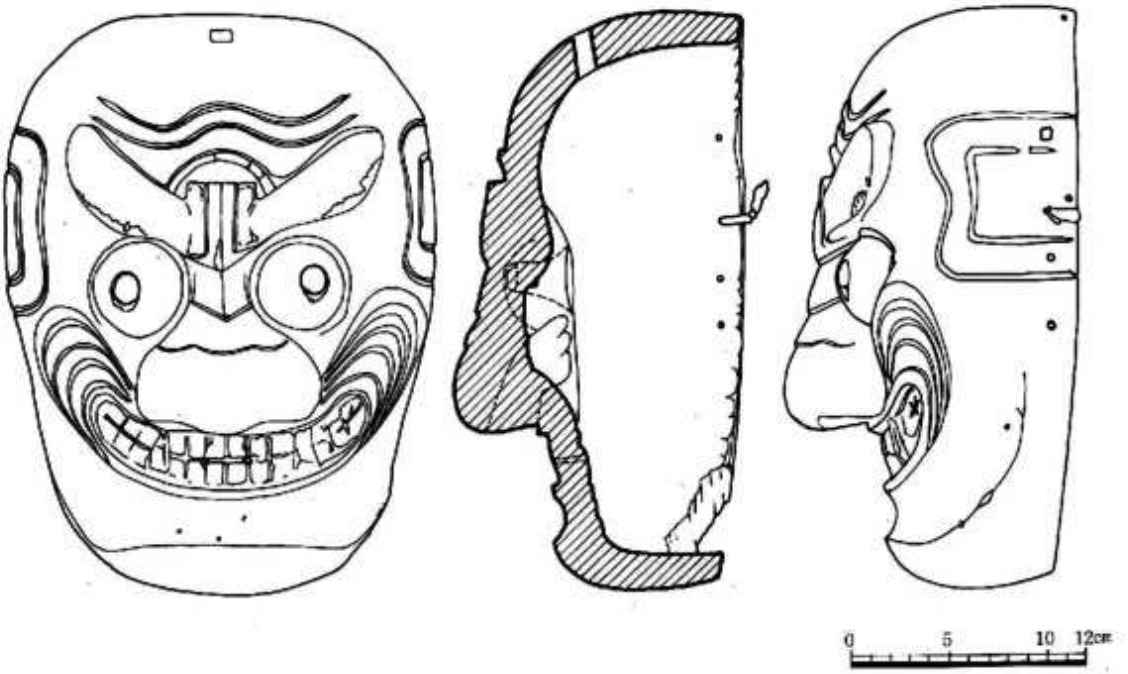


写真62　荒　鬼　面

写真63　災払鬼面

報告書抄録

ふりがな	ろくごうさんじいんいこうかくにんちょうさほうこくしょ
書名	六郷山寺院遺構確認調査報告書
副書名	馬城山伝乗寺・日野山岩脇寺・丸小野寺・金剛山報恩寺・石立山岩戸寺
巻次	Ⅳ
シリーズ名	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	原田昭一
編集機関	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
所在地	大分県宇佐市大字高森字京塚
発行年月日	1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
馬城山伝乗寺	大分県 豊後高田市 大字真中	102	155	33° 30′	131° 31′	95・04・01 ～ 96・03・31		学術調査
日野山岩脇寺	大分県 豊後高田市 大字横嶺	102	120	33° 31′	131° 31′	95・04・01 ～ 96・03・31		学術調査
丸小野寺	大分県 西国東郡武蔵町 大字丸小野	218	001	33° 33′	131° 39′	95・04・01 ～ 96・03・31		学術調査
金剛山報恩寺	大分県 西国東郡武蔵町 大字麻田	218	004	33° 31′	131° 41′	95・04・01 ～ 96・03・31		学術調査
石立山岩戸寺	大分県 西国東郡国東町 大字岩戸寺	217	001	33° 37′	131° 37′	95・04・01 ～ 96・03・31		学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬城山伝乗寺	寺院	中世・近世	ピット	土師器・陶磁器	
日野山岩脇寺	寺院	中世・近世	寺院伽藍		
丸小野寺	寺院	中世・近世	寺院伽藍		
金剛山報恩寺	寺院	中世・近世	寺院伽藍		
石立山岩戸寺	寺院	中世・近世	寺院伽藍		

大分県立宇佐風土記の丘
歴史民俗資料館報告書第17集

六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ

平成8年3月31日
発　行　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
〒872－01　宇佐市大字高森字京塚
TEL　0978（37）2100
印　刷　松　原　印　刷
宇佐市大字長洲548の1